





としま アートステーション



つくりかた

としまアートステーションYのつくりかた 目 次

- P. 3 📗 I. としまアートステーションYとは
 - I. としまアートステーション構想と としまアートステーションY
 - 2. 山本山田とかみいけプロジェクト
 - 3. 中崎透と上池ホームズ計画
 - 4. 活動記録
- P. | 3 | 2. カードゲーム「としまアートステーションYのつくりかた」
- P. | 9 | 3. プロジェクトをふりかえって

 - 2. 現場の声:アーティストと場を開いた個人は何を思ったか
 - 3. 主催者の声:としまアートステーション構想のこれから
- P. 5 I 4. としまアートステーション Y のその後: 木賃の余生の楽しみ方(考)



■このドキュメントについて

このドキュメントは、2014年度に実施した「としまアートステーション Y」をめぐるプロジェクトの記録と、そのプロジェクトから導き出された、アートステーションをつくるために必要な要素について、冊子とカードゲームという2つの形式を用いてまとめたものです。

私たちは、アートステーションをつくる際に、さまざまな可能性の中から、その都度何かを選びとっていく判断こそ、「つくりかた」として残すべきだと考えました。そこで、カードゲームという形式を用いることで、としまアートステーション Y がつくられた史実としてのプロセスだけでなく、もしかしたら他にありえたかもしれない別のストーリーについてもシミュレーションできるドキュメントを目指しました。

としまアートステーション Y の背景や記録 (第 I 章) や、それらに対する考察 (第 3 章) を読むだけでなく、カードゲーム (第 2 章) をプレイしてみることで、つくるプロセスを、 よりリアルに体感できることでしょう。

I. としまアートステーションYとは



1. としまアートステーション構想ととしまアートステーションY

私たちは、アートを生み出す小さな拠点を「アートステーション」と呼んでいます。としまアートステーション構想は、豊島区民をでアートステーションをつくり出していくことを目指す事業として、そのモデルケースととも目指す事業としています。「としまアートステーションとしまアースのひとつです。「としまアートステーション Z」が、公共施設の遊休スペースを活用し、事務が運営する拠点であるのに対し、としまアートステーション Y をめぐるプロジェクトでは、民間の遊休スペースを活用して拠点を立ち上げ、区民主体で継続する仕組みをつくることを目指しました。

プロジェクト前半は、豊島区内のさまざまなエリアで、アートステーションを開くための場や、その担い手となる人をリサーチしました。豊島区内には、空き家が2万戸以上あると言われており、地域コミュニティの希薄化や防災、防犯などの観点から、空き家問題が課題のひとつとして考えられています。一方で、そうした空き家を、何かが生まれる可能性を持つ資源と捉えて、文化芸術が生まれる受け皿として活用することにより、地域に新たな賑わいを生み出す事例も全国的に増えています。

リサーチ開始当初、私たちがイメージしていたのは、そんな空き家や空き店舗を借り上げ、自分たちの手でリノベーションをして、区民に広く開かれたアートスペースをつくり、アーティストが滞在して作品を制作・発表するというものでした。地方都市のアートプロジェクトではよく見られ、一定の成果を上げているアプローチです。しかし、空き家はたくさんあっても家賃が高いという問題や、区

民主体で継続できる仕組みをどうつくるのか という問題に直面し、豊島区における都心な らではのアートステーションのかたちを模索 することとなりました。

そんななかで出会った「山本山田」というユニット名で活動する夫婦は、自身が運営する上池袋の木造賃貸(以下、木賃)アパート「山田荘」を、地域に開かれた創造拠点にしたいと考えている人たちでした。まさに私たちが「アートステーション」と呼ぶものを、自分たちの手でつくろうとしている彼らと出会ったことで、プロジェクトは大きく前進しました。

木賃アパートのオーナーと組んでアートステーションを開くことは、リサーチ開始当初は思いもつかなかったことでした。それは、ひとつに「不特定多数の人が出入りできるオープンさと広さがなければならない」という、アートステーションの立地や規模に対する先入観のためであり、またひとつには、「事務局主導で立ち上げた拠点を区民主導へと移行していく」という、としまアートステーション構想の立ち位置やプロジェクトの進め方に対する固定観念のためでした。

「としまアートステーション Y」は、山田 荘の活用方法を模索していた山本山田と、区 民が自分たちの手でアートステーションをつ くり出していくことを目指す私たちがパート ナーとなり、山本山田の想いや熱意を私たち がお手伝いするかたちで、彼らとともにつく り出した拠点であると同時に、この実験を通 して私たちが発見した、都心における区民主 体のアートステーションのありかた、つくり かたでもあるといえるでしょう。

2 山本山田とかみいけプロジェクト







上池袋4丁目の「山田荘」は、築35年のごく一般的な昭和の木賃アパートです。6畳 I間が6部屋、トイレ共同、風呂なしの単身者向けのアパートで、これまでに学生を中心にさまざまな人たちが住んできた歴史のある場所でした。その一角の、壁を取り払ってひと続きの部屋になった I 号室と2号室で、「としまアートステーションY」は開かれました。

山田荘は、山本山田夫妻という若い夫婦によって運営されています。山本直さんは、以前、建築家の曽我部昌史さんのもとで働き、さまざまなアートプロジェクトに関わった人物です。山田絵美さんは、まちづくり活動を行う団体への助成事業や、谷中・根津・千駄木のまちなかで開催されるアートイベントの運営に携わっています。彼女にとって、実家の隣の山田荘は子供の頃の遊び場であり、「〇〇荘」と名のつく木賃アパートが狭い路地に建ち並ぶまち並みは、愛着のある風景でした。

ふたりは「山本山田」というユニット名で、 上池袋にある木賃アパートの実験的活用を軸 に、地域の未来を考える「かみいけプロジェ クト」を構想していました。それは、上池袋に点在するそれらを、ギャラリー、カフェ、アトリエ、ゲストハウスなど、さまざまな機能を持つ場に転用することで、住むだけではない木賃アパートの価値をつくり、また、家賃が比較的安いという特徴を活かして、若いクリエーターや駆け出しの起業家が集まる地域をつくっていくという構想でした。そして、その最初の事例として、また、ゆくゆくは多様な機能を持つ木賃アパートをつなぐハブとして、山田荘を地域に開いていこうと考えていました。

としまアートステーション Y は、かみいけプロジェクトのスタートアップ事業として、山田荘を拠点に木賃アパートでできる活動の可能性を探り、その事例をつくること、そのプロセスを通して、山田荘の運営やかみいけプロジェクトに携わる仲間や、地域の協力者を見つけ、関係性をつくることを目指しました。

こうして山本山田と私たちの共同プロジェクトが動き出しました。

3. 中崎透と上池ホームズ計画

ある場所を地域に開くためにやるべきことは、大きく分けてふたつあります。そこに人が集まることのできる空間を整備するというハードに関する側面と、集まった人たちと活動を生み出し、その活動がさらに新しい人たちを呼び込むというソフトに関する側面です。山田荘をとしまアートステーションYとして開くにあたって、アーティスト・中崎透は後者を担う存在として関わりました。

山本山田からかみいけプロジェクトの話を 聞いた中崎は、としまアートステーションY のソフトプログラムとして、「上池ホームズ計 画」というアイデアを思いつきます。それは、 上池袋を大きなひとつの家と見立て、山田荘 をはじめとする木賃アパートから公共施設、 私有地、路地に至るまで、さまざまな空間を、 何らかの機能を持つ部屋として使ってみると いうものでした。山田荘に軸足を置きつつも 活動自体は外へと展開することで、6畳2間 というアートスペースにしては想定外の狭さ をカバーする逆転の発想であり、活動を持っ てまちに出かけていくことで、としまアート ステーションY、ひいては、かみいけプロジェ クトを周知し、協力者を増やしていくという 戦略でもありました。

こうしてはじまった「上池ホームズ計画」では、中崎透のディレクションの下、山本山田やとしまアートステーション構想のプロジェクトメンバーであるオノコラーが大小さまざまな企画を立案し、山田荘はもちろんのこと、区民ひろば、小学校、公園など、まちなかに既にある場所に、その活動を持って出ていきました。それは、すでに機能している都市空間の中に、新たな活動が入り込む「すき間」を開拓していく行為であったともいえるでしょう。

【上池ホームズ計画】

アートステーションと聞いて、最初はギャラリー、レジデンス施設、公民館、ライブハウスや劇場とか、ちょっとした広々とした空間をイメージしていたんですが、縁あって出会った山本山田の山田荘は、6畳2間の風呂なし木造アパートでした。とりあえずいろんなことをあきらめてみました。

ここを拠点に、この近所を目を凝らして 眺めてみることにしました。

かつての学生下宿屋の山田荘のお風呂は 銭湯であり、洗濯機はコインランドリー であり、台所は喫茶店や定食屋でした。 ひとつの家の機能が街の中に分散しているようなイメージ。既存の施設や隙間を 使って、ここに住みながら手近でいかに 文化的におもしろい生活ができるか、相 談しながら試してみようと思いました。 山田荘を拠点に上池袋3丁目4丁目のエ リアをひとつの家に見立て、そんな家が いくつも重なり合うイメージで「ホーム ズ計画」と名付けました。

中崎透

■中崎秀/NAKAZAKI Tohru

1976 年生まれ。美術家。

武蔵野美術大学大学院造形研究科博士後期課程満期単位取得退学。

現在、茨城県水戸市を拠点に活動。言葉やイメージといった共通認識の中に生 じるズレをテーマに自然体でゆるやかな手法を使って、看板をモチーフとした 作品をはじめ、パフォーマンス、映像、インスタレーションなど、形式を特定 せず制作を展開している。展覧会多数。

2006 年末より「Nadegata Instant Part Y」を結成し、ユニットとしても活動。 2007 年末より「遊戯室(中崎透+遠藤水城)」を設立し、運営に携わる。

http://tohru5l.exblog.jp/

■中崎透過去作品



「福島大風呂敷」 2011 年/ミクストメディア/サイズ可変 (「フェスティバル FUKUSHIMA!2011」企画内/ディレクターとして参加)



「十万年後の誰かが、プレイボーイを注意深く観察したとせよ。」 2011年/ミクストメディア/サイズ可変



「パラレル/だからとかこそだとか」展示風景 2011 年/ Art Center Ongoing(東京)



「エピソード/鼻歌まじりの引越の時間はいつかは終わる。だから僕はなるべく回り道をする。」2011 年/ミクストメディア/サイズ可変

4. 活動記録





2. カードゲーム「としまアートステーション Y のつくりかた」



カードゲーム「としまアートステーションYのつくりかた」

1. ゲームの概要

■はじめに

カードゲーム「としまアートステーションYのつくりかた」は、2014年度に実施したとしまアートステーションYをめぐるプロジェクトを追体験するシミュレーション・ゲームです。このゲームで使用するカードは、Yをめぐるプロジェクトに関わった人や起きたことなどの事実に基づいてつくられています。

このゲームでは、プレーヤーは「まちなかでアートステーション(アートを生み出す小さな拠点)を つくる」というプロジェクトを動かすマネージャー、プロデューサー、ディレクターになったつもりで、 人・場所・活動・お金などの素材を集め、それをもとに自分なりのアートステーションをつくります。

カードは以下の手順でダウンロードすることができます。カードに修正がある場合にも、以下のウェブページに掲載します。

- I. としまアートステーション構想ウェブサイト(http://www.toshima-as.jp)にアクセス
- 2. 画面上部メニューの「ドキュメント」をクリック

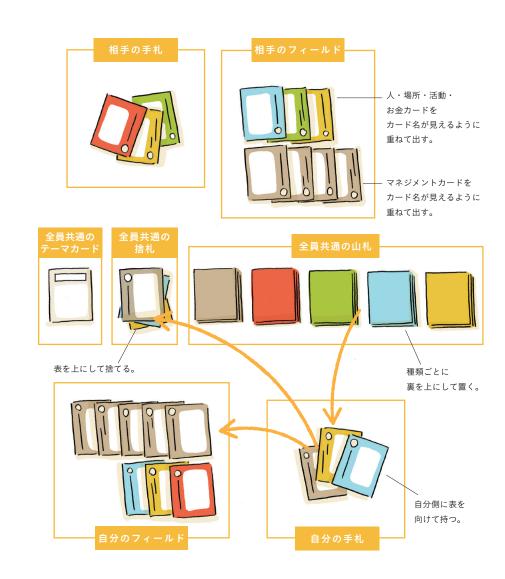
■プレイ人数:3~4人 ■プレイ時間:約20分

2. あそびかた

■ゲームの進行

- 人・場・活動・お金・マネジメントカードを、それぞれよく切って山札を5つつくります。
- 2. 各プレーヤーは、マネジメントカード 2 枚(「すぐ出す」と書かれたカードが含まれていた場合は、それをマネジメントカードの山に戻してよく切り、別のカードを手札とします)と、人・場・活動・お金カードの中から好きな I 枚を引き、手札とします(\rightarrow カードの詳細は p.16「カードについて」)。
- 3. ジャンケンで、プレーヤーの順番を決めます。
- 4. |番になったプレーヤーがテーマカードを|枚引き、全プレーヤーに見えるところに表を上にして置きます。その条件を満たすアートステーションをつくることを目指してプレイします。
- 5. 自分のターンでは、 \bigcirc ~②を順におこないます。
 - ① マネジメントカードの山札から I 枚引いて手札に加えます。
 - ② 手札から I 枚選んでフィールドに出します。指示が書かれていれば従います(→詳細は p.17「カードの処理」)。
- 6.5を繰り返し、マネジメントカードの山札がなくなったら終了します。
- 7. テーマにそって、フィールドに出ているカードでストーリーを考え、自分のつくったアートステーションをプレゼンし、「アートステーション○○」という名前をつけます。
- 8. どのアートステーションのどんなところがよいか全員で対話します。 いちばんテーマに沿っているアートステーションを選びます。

■カードの配置と、ゲーム中のカードの流れ



3. カードについて

■カードの見方



■カードの種類



• マネジメント (茶色):45枚

アートステーションを立ち上げるためのさまざまな行動や出来事を表すカード。 人・場・活動・お金カードを獲得するプラスの効果を持つものと、それらを失う マイナスの効果を持つものがあります。



· 人(赤): 19 枚

アートステーションの構成要素のうち「人」を表すカード。このカードをフィールドに出すことで、アートステーションをつくることができます。単体で出すことができるカードと、お金カードと一緒でなければ出せないカードがあります。



- 場 (青): |3枚

アートステーションの構成要素のうち「場」を表すカード。このカードをフィールドに出すことで、アートステーションをつくることができます。単体で出すことができるカードと、お金カードや指定のマネジメントカードと一緒でなければ出せないカードがあります。



· 活動 (緑): 16 枚

アートステーションの構成要素のうち「活動」を表すカード。このカードをフィールドに出すことで、アートステーションをつくることができます。単体で出すことができるカードと、お金カードと一緒でなければ出せないカードがあります。



お金(黄色): 16枚

アートステーションをつくる際にかかる「お金」を表すカード。人・場・活動カードをフィールドに出す際に必要な場合があります。



・テーマ (ベージュ):5枚

どんなアートステーションをつくるかというお題を表すカード。

■カードの処理

自分のターンで手札をフィールドに出す際のカードの指示の処理の仕方には、次のようなルールがあります。

・「すぐ出す」

自分のターンで引いたマネジメントカードに「すぐ出す」と書かれていたら、直後の手札から I 枚出すフェーズでは必ずそのカードを出さなければならず、他の手札を選ぶことはできません。 「すぐ出す」と書かれていない場合は、手札の中から任意のカードを選んで出すことができます。 ゲームスタート時の手札にこのカードが含まれていた場合は、それをマネジメントカードの山に 戻してよく切り、別のカードを引いて手札とします。

・「□□×○枚引く」

フィールドに出したカードに「□□×○枚引く」と書かれていたら、□□の山札から○枚引いて 手札に加えます。山札の枚数が足りない場合は、捨て札をよく切って補充します。

・「□□×○枚出す」

フィールドに出すカードに「□□×○枚出す」と書かれていたら、そのカードと同時に、手札から□□を○枚フィールドに出さなければなりません。もし、□□を○枚持っていない場合は、その指示の書かれたカードはフィールドに出すことができません。

「□□x○枚捨てる」

フィールドに出したカードに「□□×○枚捨てる」と書かれていたら、□□を○枚捨札にしなければなりません。もし□□を○枚以下しか持っていない場合は、持っている分だけ捨札にします。まったく持っていない場合は影響を受けません。

・「他のプレーヤー | 名とカードを○枚交換する」

フィールドに出したカードに「他のプレーヤー I 名とカードを \bigcirc 枚交換する」と書かれていたら、自分以外のプレーヤーを I 名指名し、知りたい情報について質問します(例:こんな場所を知りませんか?)。指名された相手は、手札の中から、その質問の答えになりそうなカードを選んで、質問者に渡します。役割を交代して同様のやりとりを繰り返し、 \bigcirc 枚ずつカードを交換します。

4. もっと楽しむためには

・カードを追加して遊んでみる

このゲームには、これまでとしまアートステーション構想に関わった人、見つけた場所、行われた活動のカードしか含まれていませんが、「もしもこんな人・場所・活動があったら?」など、新たなカードを追加して思考実験をしてみるのもおもしろいでしょう。

・自分の現場に合わせてカスタマイズする

このゲームは、アート活動を生み出す小さな拠点をつくるための手法(マネジメントカード)と、そのために必要な資源(人・場所・活動・お金カード)という考え方の枠組みを提供しています。この枠組みを使って、あなたの現場に合ったカードを追加し、プレイしてみましょう。また、ミーティングなどの際に、状況を可視化したり、プロジェクトメンバーで共有したりするためのツールとして使ってみるのもよいでしょう。

3. プロジェクトをふりかえって



1. シンポジウム「都市のすき間一文化芸術が生まれる場所一」



ゲスト: 小川希 (Art Center Ongoing 代表) 宮崎晃吉 (建築家、HAGISO 代表) 中崎透 (美術家)

モデレーター: 石幡愛 (一般社団法人オノコロ、 としまアートステーション構想事務局)

2015年 | 月25日、「としまアートステーション構想」に対する考えや、アートステーションが地域に対してどういった影響を及ぼすのか、空き家や都市の資源を活用するために必要なものは何かを議論するために、としまアートステーション Y シンポジウム「都市のすき間一文化芸術が生まれる場所一」を開催しました。第 | 部での、事務局と山本山田による「としまアートステーション Y」をめぐるプレゼ

第 | 部での、事務局と山本山田による 'としまアートステーション Y」をめぐるプレゼンテーションに続き、第 2 部のパネルディスカッションでは、3 名のゲストが運営するアートスペースのエピソードに触れながら、その経緯や運営方法、地域に対するスペースの開き方、文化芸術と地域との関わり方について

議論しました。

パネルディスカッションオープニング

石幡:としまアートステーション構想事務局の石幡と申します。このパネルディスカッションでは、「都市のすき間 — 文化芸術が生まれる場所 —」と題したテーマで、御三方をパネリストにお迎えしていきたいと思います。今回お越しいただいているパネリストの皆さんは、それぞれのスペースを運営されています。そうした点でとしまアートステーション Y(以下、Y)と似た事例ではありますが、とはいってもそれぞれのスペースの規模、機能、そもそも何のために、どういう文脈でやっているのかなど、三者三様であると思います。その辺りをうかがっていければと思います。

「最小文化複合施設」HAGISO の事例: 宮崎晃吉さん

宮崎: HAGISO の代表の宮崎と申します。東



HAGISO 外細



イベントの様

京都台東区の谷中で木造賃貸アパートを改修 した「HAGISO」という建物を運営しています。 築 60 年、1955 年に竣工した建物なので戦後 10年後くらいですね。HAGISO が建てられた 時代は、山田荘もそうですけどこういった木 造建築がたくさんできた時代で、基本的には 地方からの単身者が暮らす用途のトイレ共同 風呂なしアパートでした。中廊下式という真 ん中に廊下が通っていて左右に個室が並んで いる構造で、4畳半の畳と | 畳半の押入、手洗 い、玄関が全体でも6畳の中にワンセットに なっているのが 7 部屋、それが 2 階で 14 部屋 ありました。中廊下は今もその名残があって、 建物に入って右側の白い空間がギャラリーで、 左手がカフェになっています。2階の床を壊 して今では 7m くらい天井高のあるギャラリー になっています。| 階の奥にあるレンタルス ペース HAGI ROOM は物販やレンタルスペー スとして、週単位で賃料を払ってもらいなが ら貸し出しています。ギャラリーでは、基本 的に僕らがおもしろいと思った作家に企画展 をやってもらい、会場費は一切取ってないで す。ギャラリーではいろんな展示をやってい て、例えば、文京区の銭湯の保存・記録の活 動をしている文京建築会ユースという団体の 成果展を行いました。銭湯のペンキ絵を描く ペンキ絵師さんという人が東京に3人だけい て、その絵師の一番若い人が来て3時間くら いで富士山を描いたりする展示でした。あと、ギャラリーを丸ごと使ってクリスマスツリーを僕と池田拓馬さんというアーティストでつくったりしました。

|ヶ月に|回くらいのペースで展示をやってい ます。イベントを僕らは大事にしています。(写 直を見せながら) 僕が主催したわけではあり ませんが、これは谷中地区まちづくり交流会 というものです。谷中にはいろんな町内会の 団体があり、そのトップの人たちを集めてトッ プサミットみたいな交流会をやっています。 居間 theater によるパフォーマンスカフェと いうイベントでは、一定期間カフェのメニュー にパフォーマンスが入ってて、300円でカフェ の店員さんに「これください」と言うとおも むろにダンサーがやってきて踊ったり歌った りしはじめちゃう、そういう感じの活動をやっ ています。あとは2階に唯一のテナントとし て美容室(2015年時)と、私の専門が建築設 計なので設計事務所として自分も使っていま す。

もともとここは自分も住んでいたシェアハウスで2004~2011年頃まで使っていました。シェアハウスというのはずいぶん聞こえのいい言い方で、単純に丸ごとお借りして、5、6人で住んでいただけなんです。その前はずっと空き家になっていたらしいです。そんなとき、東日本大震災が起きて大家さんが心配されて

壊そうとしていました。そこで「どうせ壊す なら最後に展示をやらせてください」と提案 して、「ハギエンナーレ」というアートの展示 を企画しました。どうせ壊すからってことで、 床や壁を壊して好き勝手やったんです。それ で、SNSなどで告知をしたところ、3週間で 500人くらいの人が来てしまって。パーティー をやったら100人くらい来ちゃうし、大家さ んも一緒にすごく楽しくなってきちゃって。 これはもしかして壊すのはもったいないかも みたいな話になり、本当はもう壊して駐車場 になる予定だったんですが、マインドが変わっ てきたタイミングで「ちょっと直したらこん な感じになります」と提案して、2013年に今 の真っ黒な HAGISO としてオープンしたとい う、そういう流れでやっています。

石幡:Yに対する感想などはありますか?

宮崎:僕ら HAGISO には「最小文化複合施設」 というコンセプトがあります。その心は、僕 が今まで設計をやってきて思うところとして、 建築家の仕事は巨大な公共施設を建てるのが 花形と言われていました。以前の職場でも中 国や海外で大きい建築物を設計していました。 しかし、それが日本ではあまりリアリティが 感じられない状況で。実際に大きな建物をつ くっても使いこなせなかったり、むしろラン ニングコストだけかかっちゃったり。そこで 公共施設って何だろうと考えているときに、 もっと小さいスケールでもっと小さいエリア を対象にした複合施設で、さらに文化施設を 公共のお金ではなくてプライベートなお金で つくれないかなと思ったのがはじまりでした。 そういう意味で HAGISO は助成金も受けてい ないし、カフェの売り上げを還元するかたち で運営しています。ただ、山田荘を見るとう ちが最小って言っていいのかなというくらい ちょっと衝撃的な小ささで。自分たちが最小っ て言えなくなってきちゃうなってところがあ

りますね (笑)。

日本のオルタナティブスペースの先駆け、 Art Center Ongoing の事例:小川希さん

小川: Art Center Ongoing の小川と申します。 僕は吉祥寺で「Art Center Ongoing」(以下、 Ongoing) という HAGISO より小さいスペー スをやっています。ちょうどあと1日(注: シンポジウム開催は2015年1月25日)で7 周年になります。2008年の1月26日にオー プンしました。ここをつくるきっかけは、僕 は以前に東京の美術大学に通っていて、アー ティストたちのネットワークをもとに展覧会 を企画していました。けれども、大学を出た 後にアーティストたちが散り散りになるのに 危機感を覚えまして。どこか場所を設けてアー トを常に考えられるような場所をつくりたい という想いがありました。そのモチベーショ ンは、学生時代にヨーロッパをバックパック の貧乏旅行でまわっていたときに、小さなま ちにも「アートセンター」と呼ばれるものが たくさんあったんです。アートセンターとい う単語自体、当時の僕ら学生たちにはあまり 馴染みがなかったのですが、その施設ではギャ ラリーやカフェがあって、週末になるとワー クショップや上映会やライブをやっていて、 地域のお年寄りから若者までが夜になると集 まり、ビールを飲みながらアート談義をする 若者の横でおじいちゃんおばあちゃんがコー ヒーを飲み、そこでやっていることやアート はどうだよねって話を若者とおじいちゃんた ちが普通に話している風景がありました。こ れってすごく豊かな体験だなと思ったんです。 なんでアートセンターが日本にはないんだろ うという疑問がすごくあって、こういうのが あれば毎日自分は行っちゃうのにと思い、アー トセンターをつくることを目標にしたんです。 それで実際に活動をはじめたのがちょうど 7







展示の様子

年前になります。今思えば、おそらくヨーロッパ各地にあるってことは行政のお金も入っていて、日本で言うところのコミュニティセンターみたいな感じでアートセンターがあったんだと思います。僕は行政の中に入ってどうこうするより、本当にプライベートな場所で完全に自分が責任を負っておもしろい場所としてやっていきたいという想いがあったので、Ongoing をつくりました。

Ongoing は、モルタル2階建て、35平米ぐら いのものすごい小さな場所です。6 畳 2 間くら いの建物の2階建てで、1階をカフェ、2階を ギャラリーにしています。宮崎さんと同じよ うに | 階のカフェの売り上げで運営していて、 2階のギャラリーは全部僕が選んだおもしろ い作家たちに自由にやらせるというスペース で、2週間おきに展示が変わる場所です。おそ らく、世界中を探してみても完全にプライベー トな場所で、しかもコマーシャルでも貸しギャ ラリーでもなく、実験的なものを2週間ごと にやる場所はないと思います。それはなぜか というと、単純につぶれてしまうから。2週間 おきにどんどん作家を替えていかないと来る お客さんも変わらないんですよ。はじめは1ヶ 月周期でやっていたんですけど、3ヶ月くらい でつぶれそうになったので周期を2週間にし て、それから気づいたら7年に入ってしまい ました。

基本的には実験的な作家たちを念頭において やっている場所です。現代アートというと日 本ではあまり浸透していないので、週末にトー クショーやゲストを呼んだイベントをよく企 画しています。作家と一緒に内容について話 をしながらどういうゲストを呼んだらいいか とか、どういうイベントをやったらいいかな どを詰めています。ゲストも AV 監督のカンパ ニー松尾さんから政治家の菅直人さんといっ た方々とか、映画監督や小説家、詩人、社会 学者、哲学者などなど。基本的にはお金はまっ たくないんですけど、こういう場所が東京に あることの意義や重要性みたいなことをきち んと手紙を書いてご連絡すると、みんな車代 くらいで来ていただけています。いろんな他 ジャンルの人たちが来ることで、アート以外 のジャンルに興味がある一般の人たちを招き 入れて、そこで話が広がっていくことを目的 としています。

僕はアートのクオリティをものすごく大切にしているので、いいものをやることを念頭におきながら続けていて、おかげで奇跡的になんとかやっていけています。僕のところも助成金などは受けておらず、完全に個人経営でやっています。普通は2、3年もてばいいほうで、それが7年間続いているのは、アーティストたちの「ここをつぶしてはいけない」という意思や、「ここがつぶれちゃうと自分たち

の発表する機会がなくなる」という強い想い が、ここを支えてくれているからこそだと思っ ています。

最近は一定期間作家が滞在するレジデンスプ ログラムもはじめています。近くに一軒家を 借りて2ヶ月間国内外の作家たちをそこに住 まわせて、日本のアーティストたちと交流し たり展覧会をやったりしています。そういう ことをやっていると海外からも認識されるよ うになり、逆に日本のアーティストを海外に 送り込んだりすることもあります。

石幡:Yに関してコメントをいただいてもい いですか?

小川: そうですね。僕の場合は何をモチベー ションにしているかというと、日本にはアー トを通じてアーティストと一般の人がつな がったり、アーティスト同士が出会ったりす る場所がなかなかない状況に対して、「それで は文化は育たないのでは、という強い想いが あり、そういった必要性みたいなもので突き 動かされてここまできました。なので、どこ まで本気でできるのかが大切だと思ってて、 シンポジウム第一部の山本山田のプレゼンを うかがっていて、地域をつないでいくことが どれだけそこに必要性があるのか、大げさか もしれないけど、そこに一生かける意味や、 自分はこの場所を絶対に続けていくという強 い意思が必要だと思いました。コミュニティ をつくるとかコミュニティをつなぐというの は言葉で言うのは簡単ですけど、そこにどれ だけ本気になれるかどうか。自分の人生をか けることができるかに、きっと場所の運営は かかってくると思います。システムをつくる ことも重要だけれども、中心の人たちの「こ れがないとダメだ」という想いをどれだけつ くれるかが、最終的に継続性につながるのか もしれないと感じました。

地方で開くアートスペース、遊戯室の事例: 中崎透さん

中崎:水戸の遊戯室について少しご説明させ ていただきます。僕はもともと武蔵野美術大 学の博士課程在籍中、大学内の制作スペース で2005年1月から「中崎透遊戯室」という名 前でオルタナティブなギャラリーをはじめて いました。それから2007年の頭くらいまで、 大学在籍中に20本くらいの展覧会を企画して いました。その当時は銀座の貸しギャラリー などを借りて発表する習慣がまだ一般的だっ た時期でした。僕らもバイトして貯めたお金 で | 週間とか 2 週間とか、ただ場所で展示す るためだけに借りましたが、「逆に自分で場所 を持ってしまえばいいじゃん」と考えるよう になりました。学費はもちろん払っていたけ ど、基本的には場所代がかからないので、20 万円払ってⅠ週間借りるよりも、展覧会ごと に DM 制作費として I 万円だけ渡す仕組みだっ たのですが、2年間で20万円、最終的にお得 だったかなと。作家の個展だけど、中崎の名 前の場所だから、半分は自分の名前で発表し ているような感じになっていました。もちろ ん、自分が発表したかったのもあったけど、 それよりも当時の周囲の同世代は、すごくお もしろいけどあまり発表する機会がなかった り、ちょうど出したいタイミングがあったり する人たちがいて、そんな人たちに声をかけ ながら展示をしていました。いざやってみた ら、たまり場というか、自分のお客さん以外 の作家のお客さんが自分の場所にやってきて、 思ってもみなかったネットワークができた り、自分が興味を持っていたり尊敬している 作家と、出来上がった作品を見るだけじゃな く一緒につくるプロセスを共有したり、一緒 に店番をしたりしながら、だらだら話したり 飲みに行ったりしたことで作家同士のコミュ



キワマリ荘内観

展示の様子

ニケーションがすごくできて、そうした場の 運営や展覧会をつくることに興味が出てきた んです。そして、2007年秋に自分の出身地の 茨城県水戸市に拠点を移しました。実家に拠 点を移して、制作スペースを探そうかなと思っ たときに、そこにアーティストの有馬かおる さんがいたんです。有馬さんは愛知県の犬山 市にオルタナティブスペースの「キワマリ荘」 を 90 年代から 10 年間くらい運営していまし た。ちょうど僕が(水戸に)戻る時期に水戸 芸術館の「マイクロポップの時代」という展 覧会に参加したのをきっかけに、水戸に移住 してきたんです。その理由もよくある話で、 大家さんや地主さんと仲良くなって、「おもし ろそうなスペースやるならうちの場所安く貸 してあげるよ」みたいな感じで、水戸でシェ アスペースの「キワマリ荘」をはじめたんで す。キワマリ荘は、水戸駅と水戸芸術館のちょ うど中間地点にあって、籠ったスタジオにす るよりもギャラリー形式のオープンスペース にした方が機能するかなと思い、一室を借り ることにしました。借りたての頃は入居者が 僕らしかいなかったので、2ヶ月くらい好きに 使っていいよってことで、最初は建物全体を 使った展覧会をしました。ちょうどそのとき に小川くんが Ongoing のリノベーションの様 子をブログに投稿しているのを見ていて、多 分 | ヶ月くらい早い 2007年の | 2月 | 15日の僕

の誕生日にオープンして、先日7年目を迎え ました。

うちは、山田荘同様に玄関入って2歩でコタ ツがあるアートスペースをコンセプトにやっ ています。8畳のスペースと手前の4畳半を 事務所で使っています。今は遊戯室以外に、3 畳の AFA というアートスペースを、もともと 大学生で今は水戸芸術館のスタッフをしてい る子がやっています。お風呂もキッチンもあ る普通の一軒家なので、レジデンスとまでは いかないけど | 週間くらい現地制作する作家 がいても対応できます。以前に水戸芸術館で ジュリアン・オピーさんが展覧会をして、同 時期に遊戯室で展覧会をしていた若手作家に オピーさんが講評してくれたり、のんびりコ タツで一杯やったりみたいなこともありまし た。有馬さん自身は2009年に結婚を機に千 葉へ引っ越しました。それまでは管理人の有 馬さんにみんなが借りる形でしたが、有馬さ んが抜けたことでフラットなシェアスペース になっています。今は遊戯室と AFA のギャラ リー、デザイナーの事務所とカメラマンの方 が暗室として借りていて、サウンド系アーティ ストが物置兼スタジオとたまにギャラリーと して使い、あとはアートマネジメントしてい る子が場所は借りていないけどそこでイベン トを時折やるから家賃を少し払っている、と いう感じで運営しています。それまでは年に2、

3本くらい展覧会をやってましたが、僕自身が 水戸にいないこともあるので週末に店番する のが難しくなりました。それまでは大学生が いたので一緒に店番を気軽に頼めたけど、そ の子も社会人になって他の仕事をしながら借 りるようになったので、展覧会方式の企画は 去年はほとんどできていないです。けれども、 遊戯室というひとつのコンテンツではなく. キワマリ荘を借りている6組のグループみん なでイベントをつくるのがここ数年でおもし ろくなってきていて、1日限りのシンポジウム をやったり、突然「フェスやりたい!」ってなっ て総予算 10 万円くらいでゲストを呼んだ音楽 フェスや演劇をやったりしながら、一軒家を どんどん使い倒してます。東京との違いを言 うと、やっぱり地方は家賃が安い!家賃が安く、 みんなで分担するとお小遣い程度で場所を借 りられるので、そこで商売をしなくても成立 する。来るお客さんも、美術に興味のない人 たちが入りやすいフレームをつくっていくの を以前より意識しています。

それぞれのスペースの運営体制や コンセプトの違い

石幡: それぞれの場所をどういうプロセスで見つけていったのか、さらに見つけたとはいえ、Yもそうですがいろいろ諸条件が難しかったりオーナーさんがおもしろがってくれるかどうかが重要だと思います。そのあたりをどうクリアされたのか、今どういう体制で運営されているのかなど、運営のはじまりから継続にかけての秘訣や苦労されたことなどあればお聞かせください。

宮崎:2012年にハギエンナーレをやった後に、何となくカフェをやりたいと漠然と思ったんです。ハギエンナーレの成果もあってアートギャラリーの可能性もあると思い、アートプロデューサーの橋本誠さんに相談したら

「Ongoingっていうのがあるよ」と言われ、調べたら自分がやりたい形に近かったので、とりあえず Ongoing にアポなしで行きましたね。 中崎: いわゆる偵察だね (笑)。

宮崎: そうなんです (笑)。 行ったら小川さん がお茶を出してくれて、これはもう顔がばれた らまずいってことで、「こういうのをやりたい んですけど、やってもいいですかね」って話し かけたんです。そしたら、各エリアに | 個くら いこういうのがあってもいいよね、みたいな話 をした記憶があります。たしかに、各エリアに アートセンターみたいな場所が | 個くらいあっ ていいなと思うんです。僕がなんとなく意識 しているエリアは、町とか区の区域ではなく、 単純に徒歩圏や生活圏内のエリア。それぞれ の場所でそれぞれの担い手が覚悟を持ってる 場所があって、そういう場所がどんどん増え ていったら、めちゃくちゃ豊かなことだなあ と思っています。想いとして、自分の拠点を 設けたいことと、もうひとつ理由があります。 建築をやっている立場からすると、文化活動 はもともと美術をよりよい状態で見せるため に美術館ができ、パフォーマンスをよりよい 状態で見るために劇場ができたという順番だ と思うんです。けれども、いつのまにか箱が 前提になってしまい、劇場のためのパフォー マンスとか、美術館のための美術みたいに逆 転してるのがおもしろくないなと感じます。 もっと (アートが) 生活に近い場所にあって いいと思うし、そういう場所が必要だという 意識でやりはじめました。Yだけでなく、豊 島区内で他にやりたいっていう人が出てきた らいいと思うんですよね。質問って経営的な やつでしたっけ?

石幡: はい、経営やどういった体制で運営しているのか、というあたりをお話いただければ。 宮崎: 建物で一番大事なのはやっぱりオーナー さんだと思います。当初はめんどくさいから駐 車場にしようとしてたんですが、実際に人がその場所を使いこなそうとしている場面に出会ってしまうと、それを無下に壊すよりも違ったイメージの方がわいてきて楽しくなってきちゃうんですよね。とりあえずやってみるのは大事で、体裁を整えなくてもイベントはできると思うんです。 I 回やってみるとイメージが明確になってきて、話が進むと思います。 僕も「ハギエンナーレ」をやったことはすごく意味があったし、そのあとにどうやって運営していくかを考えるようになりました。

うちの場合は延床 160 平米くらいあるんです。 そうすると、たしかに好意で安く借りてるもの のお小遣いでなんとかなる規模ではないので、 ちゃんとお金を稼がないといけない。カフェは 今24席で、基本的にカフェの売り上げを家賃 や光熱費、人件費に充てながら運営できていま す。まだ2年目なので3年くらいが勝負だと思っ ていて、なんとか3年の壁を越えていければ、 一応運営実績として証明できるかなと思ってい ます。今のところ、運営規模は社員やアルバイ ト含めて8人くらいでやりくりしています。彼 らを養うためにも、人件費だけで毎月 100 万円 くらいかかりますからね。売り上げは、カフェ だけで月に300万円くらいはいいときは稼ぎま すけど、飲食店は水もので季節とか天気とかで 幅ができるので安心はできないですね。もちろ ん、売り上げがでたらきちんと従業員に還元し ながら、楽しみながらやっています。| 年目は 経営的になかなか厳しかったけど、2年目になっ て順調に経営できるような体制になってきたっ て感じですね。

石幡: すごいですね。

中崎:カフェ先輩からどうですか。

小川:まず、なぜ吉祥寺かという話について。 多くの人にはあまり馴染みのないことかもしれ ませんけど、中央線って吉祥寺から少し西に行 くと家賃がだんだん安くなっていくんです。西 に行けば行くほどアーティストたちが増えてきて自分のアトリエや倉庫を持つようになり、吉祥寺より東に行こうとすると、交通費や時間の問題でなかなか足を運びづらい。また、吉祥寺から東は普通に企業に勤めてる人たちが多く住んでる。そういう人たちが西に来られる限界が吉祥寺ぐらいかなって。そうした理由から吉祥寺を選びました。

お金についてですが、アートセンターをつくる 目標はあったけど、家がお金持ちでも企業のサポートがあるわけでもないので、バイトをした り博士課程までの奨学金のほとんどを使わずに 貯めたりしながら、完全に個人でお金を用意し ました。物件は本当に運命的な出会いでした。 I 階が純喫茶で2 階は住居だった建物がちょう ど見つかって。I 階と2 階の入り口が別で、不 動産屋的には I 階のカフェなりお店をやる人が 2 階に住む想定だったんだと思います。

吉祥寺は、今では住みたいまち No.1 と言われ ているせいか、すべてが高いんです。そういっ たなかで、自由にリノベーションできる物件っ てほぼないんですよ。Ongoing の物件は築 45 年くらいの建物で、自分たちでリノベーショ ンできる構造とわかったので、「こういうこと やりたいんです。こんなに素晴らしくなりま す」ってビフォーアフターみたいな書類もつ くって大家さんに交渉して、家賃もちょっと 下げてもらいました。その資料もCGが得意 な友人につくってもらって、それを大家さん に持っていって「こんなにきれいになるなら いいね」みたいな話になって。家賃に関して も文化的なことをやる貧乏青年をアピールし て (笑)。けど、それでも家賃22万円もする んですよ (笑)。小さいけど吉祥寺だからこの 値段だし、中をリノベーションするお金もな いから、友人のアーティストたちに手伝って もらいながら壁を壊して床をはがして、ギャ ラリー用の壁をつくって、I 階と2階に穴を空

けて入り口をまとめてひとつの空間にしたん です。運営については、今はカフェの従業員 が上人いますが、はじめはお金がなかったか らカフェの仕込みもギャラリーの運営も全部 自分でやってました。よくすぐにつぶれなかっ たなと思います(笑)。22万円の家賃とカフェ の仕込みを考えると、運営するだけでした月 に40万円は絶対に稼がないといけない。とい うことは | 週間に 10 万円。 | 週間に 10 万円を 現代アートのスペースで稼ぐのは難しいので、 さきほどの宮崎さんの月に300万円の売り上 げというお話には驚愕です。Ongoing の 7、8 ヶ 月分を1ヶ月で稼いでる計算ですよね。僕の 場合、カフェと週末のイベント入場料とドリ ンク代の売り上げでギリギリでまわせていけ るぐらいですから。

中崎: リアルな金額の話が出て正直ビックリ しています。僕の遊戯室は月に1万5千円く らいなんですよ。内緒ですよ (笑)。有馬さ んが出会った地主さんは、宮崎さんの話と同 じで最初は駐車場にしようとしてたんです。 自分の地元の、しかもわりと中心市街地のと ころが駐車場になっていくのは、地主の人か らするとリスクがなくてすぐ売りやすくて楽 な土地の利用方法だからです。でも、楽だか らといってどんどん市街地が駐車場だらけに なっていくのって、やっぱりつまらないと思っ ているんです。なので、僕たちのようにいろ んな人を呼ぶ場所にするっていう提案に対し て「それなら安くするよ」って感じでスター トしたら、やっぱりその大家さんもちょこちょ こ遊びに来るんですよ。普通の町中じゃ見か けない得体の知れないやつがけっこういろん なところから来る、でも、話してみたらおも しろくて、大家さんも楽しんでくれて徐々に 家賃も下がっていって。「大変だろ、お前ら」 みたいな (笑)。「駐車場も付けちゃう!」みた いな (笑)。やりたいときに本当に時間とエネ

ルギーを自分たちでかけてやるところがではくおもしろい。時折自分のスタジオととともあれば、普通にオフィスのあるし、共有スペースもある。ののおとったときにが来たときに対した。とれるというではなくです。別にそれがある。をもられていたののアンとしたことがある。としたことがあるというではからではいいう意味ではないんだけどれる。別にそれが思いわけではないたがしているというではよりではないによりであるというではないます。

石幡: 行政のお金がないということは縛りがないことだし、自由なことできますしね。

中崎: もちろん(行政のお金をもらうことに対して)良いことと悪いことの両方があると思いますけどね。

スペースと地域との関係

石幡:事業としてペイする仕組みをつくる方法もあるし、「この場所は必要だ」ということでいろんな人が労力を提供してくれることもある。入居する人たちでシェアしたりと、いろんな運営の仕方があるんですね。実際にその場でやってみて、地域に対する影響やみなさんが考えていらっしゃるスペースの周囲に対する影響はありましたか?変わったことやこんな効果があったとか。

宮崎:今はまだ2年目なのでいろいろ試行錯誤の途中で、これまでHAGISOの中ではいろんなことをやっていましたが、これからは外に開いていこうと思っています。例えば「サマーキャンプ」。谷中は魅力的なまちなんですけど、そこの価値を掘り起こしてさらに再認識するというのがHAGISOの大事な役割だと

思っています。実際、谷中は魅力的なものが あるのにそれがどんどんなくなっているんで す。HAGISOをやる2年前に、HAGISOの2 軒隣に「初音湯」という銭湯があって、めちゃ くちゃいい銭湯で僕らもよく通ってました。 それが、自分が出張から帰ってきたらなくなっ て普通の分譲住宅になっていたんです。もち ろん、そういう選択肢も今の時代はしょうが ないけど、だけど僕らからすると木造アパー トでさえリノベーションすれば変わるんだか ら、銭湯がリノベーションしたらもっと魅力 的な場所になるのは間違いない。そういうポ テンシャルがあることをオーナーが気づかな かったり、そういう選択肢があることが想像 できないばかりに、不動産の人に言われるが ままどんどん話が進んでいっちゃう。2軒隣に 住んでいるのに何もできなかった口惜しさが HAGISO のモチベーションにもなっています。 最近もそうした魅力的な建物がなくなってい て、このままだと谷中はつまらない場所になっ ちゃうなと思っていて。そうしたことを地域 で問題視してる人も多い。課題をきちんと顧 在化させるのは大事だと思ったので、HAGISO のギャラリーで | 週間学牛ワークショップを やったんです。谷中にあったノコギリ屋根工 場を題材に、そこがどうやったらもっと魅力 的になるかを考える。しかも、カフェ営業中 に授業みたいにホワイトボードでやりとりし てる。カフェの隣で一生懸命学生たちが模型 をつくったりして、最後にプレゼンする様子 を、まったく関係ないカフェ目当てに来た人 たちの横でやっているから、みんなが見はじ める。現場で課題に思ってることを会議室や 閉じたところでやってもインパクトはないの で、人目に触れるところでやるべきだと思っ ています。他にも、もっと周辺のエリアに対 して働きかけることもやりたいなと思ってい ます。

小川: さきほども言いましたけど、吉祥寺は 住みたいまち No.1 に選ばれるようなところ で、ほっといても人がどんどん来るんですよ。 地元のお店の多くは3代目くらいになってい るんですけど、もはや自分の祖父や父親がつ くった昔ながらのお店を継ぐ必要もなく、テ ナント貸しすればお金は稼げると聞きます。 井の頭公園があるから少しは違うかもしれな いけど、吉祥寺の駅前なんてどこにでもある ようなチェーン店だらけ。吉祥寺ならではの お店は、ここ数年でどんどん減っている印象 を受けます。テナント貸しならば、今あるも のが潰れてもすぐに新しいお店が入るからな かなか危機意識も持ちづらい。けれども、こ のままだと吉祥寺はあと 10 年後には住みたい まちとしての魅力を失うと思ってる地元の人 たちも一方ではいて、そういう人たちが僕の ところに来て「なんとか吉祥寺を昔みたいに オリジナリティのあるまちにできないか」と 相談されるようになってきました。僕のとこ ろはアンダーグラウンドな場所だと思うんで すけど、吉祥寺がどんどんつまらなくなって きているなかでここだけはちょっと頭のおか しいやつがやっていて、週末になるとおかし な若者たちが大量に集まる場所だってことが ちょっとずつ周囲の人たちに知られてきてる。 最近は、まちづくり会議みたいなものに呼ば れて話をしてくれとか言われるようになって きました。今日、豊島区を昼間にちょっとだ け歩いたけど、ここの地域はまだお隣との距 離が近い感じがしますね。吉祥寺はマンショ ンだらけで、一軒家でも隣に住んでいる人と の交流はほぼないんです。そういう意味で、 地域の再生は僕のまちよりかは希望があるの かなと思います。逆に吉祥寺のような都市部 の方はどうやって金を儲けるかとか、この土 地をどう転がすかとかそんなことしか考えて ないし、アートイベントをやるとしても、ど

れだけここに人が来るのか、ということばかり聞かれる。そういう人たちを相手にするのはけっこう大変で、僕は都市部でアートをやるほうが難しいと思っています。

地域に対して開くのか、そうでないのか

石幡:中崎さんは、ご近所に対して何かアプローチしようとしていることはありますか。

中崎:水戸のほうでは、不親切というか、お 客が来ても一銭にもなんないから別に来なく てもいいやと半分思ってて。としまアートス テーション構想でやってることとは真逆なん ですよね。だって遊戯室はこっちがお金払っ て運営してるわけだから。遊戯室をはじめる ときも「地域って言ってるのはもう面倒だよ ね」みたいなところからスタートしてる。「い いアートはわかるやつだけわかる、すごくい いものをしがらみなくやれる場所をつくりた いな」って想いが最初にあった。けど、いい ものをみんなにわかってほしいと思っている から、専門家以外の人にも来てほしいし、ハー ドコアなことをやるけど、入り口はコタツで アートがわかんない人も来てほしいし、なん かわかんないけど楽しいところだね、みたい な感じにはなりたいっていうのはある。けれ ども、アートプロジェクトで僕はけっこうい ろんな場所に行って、人が関わる作品づくり をしているんですけど、町内会にしても地元 にしても、挨拶回りして飲み会に行ったりコ ミュニケーションとったりしながらそこで仲 良くなってそこの人たちと一緒に何かをやっ ていく、みたいなことは丁寧にやろうと思え ばできる。外でそういうことはするけど、地 元に関しては怒られない程度に挨拶するぐら いでそんなに距離は近くはないし、意図的に 地域へ積極的に関わる感じのことはしていな い。けれども、山田荘でもやったけど、キワ マリ荘でもガレージセールを毎年やっていま

す。市内の雑貨屋さんやデザイナーの人、飲 食店の人が持ち寄ってやる3日間のイベント で、地域に開いてることもあったりする。け ど、基本的には自分らにとって心地いいこと 以上はそんなに背負わなくていいやって思っ てる。ギャラリーやって1000人来ても1円 にもならないし、別にドリンク売ってるわけ でもないから「お客様は神様です」ではなく、 お客さんと僕らは対等だなと思ってる。普通 に来てくれてありがとうございますって感じ だけど、割とフラットな関係でいられる状態 が一番心地いいかな。僕はある意味で閉じて もいいと思っていて。例えば今回Yに関わっ て、地域にこういうのがあって、子供から大 人からお年寄りまでいろんな世代の人たちが 交わって、アートや文化で素晴らしいまち、 消滅なんか全然しません豊島区! みたいなの は、僕が言うのもなんですけど、うさんくさ いと思うんですよね。そんな全方位的にいい ことってまずありえなくて、実はすごくマニ アックなコミュニティの連続だと思うんです。 ほんとにハイなこと、数学でも研究でも物理 でも自然科学でもいいけど、より高度なこと になればなるほど数人しかわからない世界は 絶対にある。隣のやつに数式見せられても何 言ってるかわからない。けど、それはものす ごい大きな何かをもたらすことかもしれない。 僕は、ある専門的なやつらが閉じちゃうことっ ていいことだと思っていて、けれどもそのわ からないことに対してわからないから排除し ようではなく、わからない隣人に対してポジ ティブな気持ちで接することができるか、許 せる関係性ができるかどうかがすごく大事だ と思っています。

宮崎: 僕も地域貢献って言葉には違和感がある。だいたいそんな義理もないし、自分たちで経済活動をやっているわけだから、やりたくてやっているだけ。ただ、そこで言えるのは、

その都市の奥行きをちゃんとつくっていこう とする行為なのではないでしょうか。都市に はいろんな人たちがいて、さまざまレイヤー があるものが都市だと思ってる。池袋も吉祥 寺も、実はすごく郊外的な風景なのかもしれ ない。そうすると、お金と床面積だけで単純 に計られるものになっちゃう。だから、そこ にあるいろんな価値が完全に抜け落ちてる。 そこに対して、奥行きを持たせるためにすご く閉じたコミュニティだったりすごくエッジ なことをやったりすることは、実はすごく大 事だと思うんです。でも、本当に閉じすぎる とそれもそれでよくないから、「普通の生活の すぐそばにそれがある」っていうのがすごい 価値だと思う。そういうものが、実は地域に 対する価値になってくるんじゃないかな。

中崎:誤解しないでもらいたいんですけど、 僕は今、遊戯室の人間で呼ばれているからこ んなこと言っているだけで、Yとしてはそん なことないですよ (笑)。ほんとにどんどん開 いていきますよ。どっちもいけますから。

文化が地域になにをもたらすか

石幡: 今のお話に関連すると、アートプロジェクトは田舎や地方でたくさん企画されてるけど、それを東京でやったらどうなるんだろう、という実験がとしまアートステージョン構想でもあるんです。都心でやるアートいるのだろうかと。先ほどのさまざまなレイヤーがあるとか、異なるもの同士が隣り合わせでいる話は、としまアートステーシー構想の全体を考える上ですごくつながしているがとと思いました。第一部の山本山田さんのプレゼンで木密地域不燃化 10 年プロジェクト(※1) の話がありましたが、都市計画という分野において、建物の延焼を防ぐまちづばり、そうに論理だと思うんです。でもやっぱり、そう

した王道なアプローチではこぼれ落ちてしまう部分だったり、ないがしろにされてしまったりする部分に、どうやって光を当ててプローチしていくのがこのYの裏テーマでもあると思うんです。豊島区の文化政策は、生活の文化をいう横串を刺し、文化という価値観やアプローチを使って関わり間にアプローチしていくだけではなく、そっところがある。物理的な隙間にアプローチしていくだけではなく、なところに文化がアプローチしていく意味合いもある。そのあたりについて、ご意見やそれぞれの経験でこんな隙間にアプローチしているなどあれば、お話いただければ。

小川:コマーシャルギャラリーや美術館に対 するものとして「オルタナティブ」という言 葉がアートの世界ではよく言われたりします。 ちょっと言い方が乱暴かもしれませんが、コ マーシャルギャラリーは作品を売ることが目 的の場所で、美術館は公に対してサービスを 提供する場所と言えます。オルタナティブス ペースはそのどちらでもなく、どちらでもで きないことをやるから「オルタナティブ」と 言われるのだと思う。僕自身は自分のスペー スをオルタナティブスペースと名乗ったこと はありませんが、「東京のオルタナティブス ペースといえば Ongoing」といった流れで、 取材を受けることがよくあります。一方は経 済、一方は公共だとすれば、自分のスペース はお金でも地域への貢献でもない。中崎くん のように自分の好きなことを自分で責任を 負って続けている、ただそれだけの場所なん ですよね。そういうものがどうやって継続し ていけるかに尽きる気がします。それは冒頭 でも言いましたけど、やっぱりその活動を大 切にしたい想いがどれだけあるか。Yの話であ れば、山本山田さんの中にあるのか。「木賃」

をひとつのキーワードにして、地域をどれだ け大切にしていきたいか。そして、形骸化せ ずにやれるかどうか。地域と言うと、それだ け聞けば聞こえがいいじゃないですか。例え ば僕だったら、日本でもっといいアートをつ くっていく、みたいなことを言ったらすごく 聞こえはいいけど、「そもそもアートって何だ ろう」と疑うことをやめないんです。「自分た ちにとってのアートとは」「この時代にとって のアートとは」「アートで何ができて何ができ ないのか」「どこまでアートとしてやっていい のか」。僕はアートを武器に生きているけど、 自分のアイデンティティを常に疑い続けるこ とが、形骸化しないでその活動を維持してい く原動力になるんだと思っています。お金だ けでなく、公共だけでもない、自分にとって のアートとは何だろう、ってことを常に考え ながらやることで、「やっぱまだつぶれちゃい けないな」とか、「まだこんなことができるか も」とか、そういうのを考えることができる んだと思います。

宮崎: 先日、HAGISO で建築家の西村浩さん をお呼びしたイベントの中で、彼が「隙間が すごく大事」って言ってたんです。つまり、 隙間というのは、彼の表現だと今までは高度 成長期とともに縦割の領域でそれぞれの分野 で頑張っていたけど、そうした縦の領域では なく、横につなげないといけない状況になっ た。その間の溝のことを「隙間」と呼び、そ れをつなぐのが建築家の仕事だという話をし ていました。僕自身が建築の立場として、自 分で場所を持ってからすごく自由になったと ころがあって、今まで建築家がやらなければ いけないと思っていたものとは違う形で、場 をつくることができると感じた。僕はどちら かというと好奇心だけでやっているんですけ ど、この場所がさらに違う価値を持つことを 考えるのが楽しくてやっている感じがありま

すね。そういう意味で、今HAGISOを運営してておもしろいのが、空間的に分けられていた機能が時間的に切り替わることで、おもしろい価値になると思っています。それこそ、美術館はあそこに行く、パフォーマンスはどこどこに行く、と空間的に分けられていたものが、同じ場所だけど時間によって全然違うものが行われることで別の価値が生まれてくることが、これからおもしろくなるのかなって思っています。

中崎: 文化ってよくわかんないけど、僕も、 山本山田が言ってた不燃化ってわかるよね。 やっぱりまちを歩いててあの密集した木造工 リアで火事が起こったときのリスクを考える と、ある種の怖さもある。行政からしてみた ら、災害や火災が起きたときに絶対に責めら れるしリスクがある。一方で、全部が駐車場 と高層マンションだけになった場所のつまら なさもすごくわかる。文化のおもしろいとこ ろは、振り幅だと思ってる。それがある種の 豊かさだったり、そこじゃなきゃいけない色 だったりが生まれてくると思う。ほんとにだ めなやつもいないと、おもしろいやつも来な い。例えばスペースで、「うちはお金持ってい る人しかだめですよ、インテリの人しかダメ ですよ」って言ったらそんな都合のいいやつ ばかりが来るわけはない。そしたらすごくつ まんないやつしか実は来なかったりする。逆 に、「何でもいいですよ、誰でもおいで」って 言うと、めんどくさい人が来るけど、おもし ろい人も来る。そういうのが混じるからおも しろい。それって両方込みなんですよね。リ スクとリターンじゃないけど、それがないと おもしろくない。でも、それが行政的なフレー ムにいくと、やっぱりその両方のリスクを説 明していくことは絶対難しくて、すごくやり にくい。教科書通りの方法では、さっきの不 燃化みたいな話になるのはすごくわかる。け れども、僕らがおもしろいと思う論理はそこじゃないところにある。いろんな人たちが混じる状況は、すごく芸術的文化的な思考方って、木賃みたいなものを完全に全部残したらいいかというと、そういうわけにも多分いないのはわかっているので、どういう残し方や判断やリスクがあり、リスクとおもしろさをどう判断していくか、いろんな視点が入りながら落ち着くのかは、そのまちの個性や状況によるのかも。

小川: それって、一言でいうと「精神的な災害に備えている」って言えるのかもしれないですね。

中崎:あ、でもそれはねえ、いい!

小川:「無色透明な建物ばっかりが並んだときに、次は精神的な災害が襲ってきますよ」って言えるのかもしれない。どっちに備えるかって言ったときに、文化は「精神的な災害」を止めようとしている、みたいなことなのかもしれないですね。

質疑応答:

地域が持つ価値をどう再認識するか?

石幡:では、ここで時間になってきたので会場から質問やご意見を聞いてみたいと思います。

質問者:本日はありがとうございました。豊島区の池袋本町に住んでいる者です。私の地域は池袋北地域という場所で、上池袋と東上線の線路をはさんで西側なのですが、豊島区の中で「忘れられた土地」と言われています。さきほどそれぞれの地域で文化創造発信拠点が点としてできた場合、それを自分としては点から線へゾーニングをつなげて、そこをひとつのブランドとして昇華できるといいなとののブランドとして昇華できるといいなよのがあったら教えていただきたい

と思っています。その背景にあるのは、さき ほど話で出た不燃化についてで、私も都市計 画マスタープランの打ち合わせや不燃化説明 会によく参加するんですけれど、多分ここに 集まったみなさんとは考えが真逆で、キレイ にしたほうが住みやすいのではないかと思っ ています。確かに、木造住宅密集地域を壊す のは大変だけれども、豊島区の行政の説明で 特定整備路線という道路が設置されることで、 年配の方々が多い地域では住みやすいまちに なるのかなと思っています。私がそういう説 明会などに出席して、みなさんと同じような 文化発信とか木造住宅密集地域でなにかでき るか言っても、中崎さんも話していたように 「災害が起きたときにあなたはどういう責任 がとれるのか」と質問されるんです。地域住 民の方々にしてみれば、こういう文化創造発 信の拠点が新たな資源になるということは、 ちょっと伝わりにくい。そこで、そういった 方々にもわかってもらい、実はそういう木造 住宅密集地域や路地裏の記憶みたいなものが 資源になるということをわかってもらうため に、どうアプローチしていけばいいのかをお 聞きしたいと思っています。

宮崎:最初にあった「忘れられた土地」という表現、それって実はすごい価値なんじゃそういかと思うんです。実は、谷中もずっとと、京の山手線の内側なのに、開発からに住んですると忘れられている。谷中に住んです。と忘れられている。谷中に住んでする人たちも、みんなうちにはビルがないて、劣等感を感じてたらしいんです。それがになっているすごくユニークな状態にってんないるすごくユニークな状態にってんてまでとは反対の価値に変わっとか便利すよ。やっぱり、住みやすいとか便利って、ですよ。やっぱり、住みやすいとか便利すよ。そこに住んでいる人が何に価値を見出して

むかが一番大事で、その価値を見出していく 試みとして、アートステーションが機能する と思うんです。ただ、施設のブランディング を期待しても実はかなり無茶な話だと思って います。ぼくも HAGISO をやっていますけ ど、HAGISO が谷中の価値をつくったなんて これっぽっちも思っていない。めちゃくちゃ 谷中の価値に乗ってるんですよ、どちらかと 言うと。住んでる人たちの小さな意識の集積 によって生まれるもので、僕らはちょっと 乗っからせてもらってるだけなんです。なの で、やっぱり点がすべてをブランディングす るのは不可能だと思います。しかし、逆に言 えばみんな HAGISO を含めてあれくらいのこ とだったら誰でもできちゃうわけだから、もっ と今の自分でしかできない楽しみ方をやって いくことで、その地域の個性や文化ができて

中崎:いいですよね、その「忘れられた」っていうブランディング。考え方をどうひっくり返すかはひとつの見立てで、それはすごく美術のおもしろさだと思うんです。植木が並んでる道を自分の家の庭とするような、公共の道と言われているものも「ここは私の道」みたいな気持ちにみんなが思うことで出てくる「公共性」に僕はすごく興味があって。それは次の課題を解決するためのキーワードや作法なんじゃないかなって思っています。

くるのかもしれません。

石幡:ありがとうございます。いろいろ質問をしたい方とかいらっしゃると思うんですが、時間が過ぎてしまいましたので、すみませんが | 件だけで締めさせていただきたいと思います。今日はゲストのお三方にお越しいただき文化拠点のさまざまなあり方について話をしていただきました。どうもありがとうございました。

【ゲストプロフィール】

■小川希

Art Center Ongoing 代表。1976 年新宿生まれ。2001 年武蔵野美術大学卒。04 年東京大学大学院学際情報 学府修士課程修了。08 年に吉祥寺に芸術 複合施設 Art Center Ongoing を設立。

■宮崎晃吉

建築家。HAGISO代表。1982年群馬県生まれ。一級建築士。2008年東京藝術大学大学院美術研究科建築設計 六角研究室を修了後、II 年まで㈱ 磯崎新アトリエ勤務。現在は、HAGISTUDIO主宰、HAGISO代表を務め、東京、谷中の木造アパートを改修した施設HAGISOを拠点に、建築、会場構成、プロダクトのデザインを手がける。

■中崎透

p.7 参照

※1 木造建築物の建替えや除去の促進、延焼遮断帯となる都市計画道路の整備等により、燃えないまちをつくる東京都の取り組み。上池袋地域も対象となっている。

2. 現場の声:アーティストと場を開いた個人は何を思ったか



左から、中崎透、山田絵美、山本直

中崎秀(アーティスト)

山本直(山本山田、ヤマモトアトリエ主宰) 山田絵美(山本山田、市民社会創造ファンド プログ ラムオフィサー)

インタビュアー:としまアートステーション 構想事務局

初期設定とその難しさ、山本山田との出会い

一山本山田と出会ったことからとしまアートステーションY(以下、Y)を上池袋で展開することになりました。2014年10月からは、招聘アーティストの中崎透さんの滞在がはじまり、さまざまなイベントや展覧会が開催されました。まずはみなさん、長い間おつかれさまでした。今日は、この1年間を振り返ってみてどうだったのか、それぞれできたこと、できなかったことなどについてお話いただければと思います。はじめに中崎さんにお聞きしたいのですが、当初準備段階では、商店街でプロジェクトをつくっていこうと私たカー考えており、中崎さんに対してもそうしたオー

ダーをしていました。しかし、商店街の空き 物件を探していたけどなかなかいいスペース が見つからず、結局商店街で場所をつくるこ とは実現できませんでした。場所探しをして いたプロジェクトの前半について振り返ると いかがでしょうか。

中崎: 今回は、作家として好きに作品をつくってくださいというオーダーよりも、ディレクションに近い仕事だったかな。一筋縄じゃいかない状況に対して、自分のスペースを運営していた経験をもとにアイデアを考えるつも、オーダー側が想像していたものとは違うもでからおもしろいな、という気持ちで生事を進めていたところがあります。オーダーが状況によって変わることもありえるいた。まとと状況が変わったのも事実。はじめは、マージによる「階が店舗で2階が住居のリノスを方にある」階が店舗で2階が住居のリノスを方にある」階で展示やワークショップ、ライブが

できるオープンスペースをイメージしていました。見つからなかった理由は、オーナーさんとの交渉など難しいものがあったと思うけど、一番の要因としては予算だったのかなと思います。正直言えば、想定していた予算枠で商店街にあるスペースを維持しつつ一定期間運営していくのは難しかった。その難しさを考えていたときに、山本山田と出会え、前に進んでよかったと思います。

- 事務局が山本山田と出会ったのは、ちょう ど夏くらいの時期でしたね。

中崎: 事務局と商店街の物件を探していたと きには、2ヶ月くらいの短期集中スペースをイ メージしていました。それはなぜかというと、 プロジェクト全体の予算の中で、家賃にまわ せるのは30万円くらいという話があり、それ を豊島区の家賃相場を踏まえて物件を借りよ うとしたら、1ヶ月に I5 万くらいの費用がか かる。なので、2ヶ月集中でイベントやワーク ショップをやる場をつくろうと思っていたら、 主催側としては10月から3月までの運営を想 定していた。そうすると家賃に割ける予算内 で借りられる場所が豊島区にあるのだろうか、 と思っていました。そんなときに山本山田と 出会い、山田荘に行ってみたらすごくいい場 所でした。当初は商店街のスペースで通り沿 いにあって、お客さんが出入りするイメージ でしたけど、逆に路地の奥にあってその場所 を足がかりにしてエリア全体を使って楽しめ るようなものができるといいな、と山田荘を 訪れてそんな気持ちになりました。商店街の どこかで何かをやってみるのは、方法論とし ては王道で正しい。だけど、ゼロから何の縁 もない僕らが立ち上げるよりも、地元の人で ある山本山田が山田荘で何かをしようと考え ていて、けれどもどうやっていいかわからな い動きはじめのタイミングに対してサポート し、そこから自立してもらうというストーリー

は、モデルケースとしていい例だと思います。 僕の立場から言えば、ゼロから Y をつくるよりも、これから山田荘が僕たちのサポートを離れてオルタナティブスペースとしてまわっていくための足がかりになるような状況をつくれたらいいなという考えが、山田荘でやると決めて話を進めていくうちにクリアになっていったかなと思います。

山本山田が山田荘を開いた理由

たしかに、当初は事務局としては先に場所 を見つけて2ヶ月間物件を運営し、そのなか で継続的に運営できる人を育てる仕組みづく りをしようと考えていました。しかし、一方 で事務局としては、その仕組みをつくって継 続的に運営できる人に任せることが果たして できるのだろうか、とも思っていました。そ こで、コミュニティづくりをやろうとしてい る人をパートナーとして見つけて一緒につく り上げていき、場所は後からついてくるよう なパターンも考えていました。そうしたら、 山本山田と出会ってパートナーも場も両方が 一気に見つかったという印象があります。と ころで、山本山田と出会ったときには、おふ たりにはすでにここを開いていきたい想いが あったと思いますが、それはいつ頃からどの ような経緯でそうお考えになっていたのです

山田:山田荘は私の実家が所有する木造賃貸アパートであり、いつかこの建物を私が相続することはわかっていました。また、前々からこのアパートに愛着があり、ここを壊したくないという気持ちは持っていました。これまで山田荘にはいろんな人が住んでいて、私たちが2013年12月にこのアパートに戻ってきて住み心地を体験したことで、具体のイメージが湧いてきました。

一 山田さんたちが住む前から、ここにいろん

な人が住んだり遊びに来たりということは、 外に開く場所にしようという想いがもともと あったんですか。

山田: たとえば駆け出しのデザイナーや建築 家、アーティストなど、お金はないけど夢は あるような人たちに安価で提供し、おもしろく使ってもらえればいいな、と思っていました。また、建物の記憶として、住まいとしての使い方だけではなく、母の着付け教室で使ったり、子供たちの遊び場となったりする場所でもありました。そのため、オープンスペース的な使い方をしたいというのは、自然と思うようになりました。

一 山本さんは、こちらに越して住んでみて、 実際にこの地域で暮らしてみて、最初はどう でしたか?

山本:知らない場所であったこともあり、はじめは多少戸惑った部分がありました。しかし、上池袋で生活をする中で、よくよく見ると地域におもしろいものがたくさんあるな、というのが月日を追うごとに増してきて、だんだん自分のまちっていう意識が芽生えはじめてきました。山田荘自体も、かつては子供たちの遊び場だったり、ある時は洋裁教室だったり、ご近所の方が自然と集まりお茶をしていくような使われ方をしていたこともあり、ここはすごく価値のあるところだと思いました。そこから、ここをうまく使っていきたいね、という想いが膨らんでいきました。

一まずは山田荘の使い方を実験してみたい想いからはじまったと思うんですけど、私たちや中崎さんと話をしていくうちに、地域やまわりの人とのつながりもつくっていきたいとか、木賃のアパートのネットワークをつくりたいといった考えは、どのあたりから生まれてきたのでしょうか。あと、私たちと会うきっかけは、事務局の冠からの紹介でもありました。その出会いや紹介のきっかけもおうかが

いできればと思います。

山本:昨年、市原市で開催された「中房総国際芸術祭いちはらアート×ミックス」へ行った際に、冠さんとたまたま再会しました。そこで、互いの近況を話すなかで、冠さんがとしまアートステーション構想事務局に勤務していて、豊島区内に新規のアートステーションを開設するにあたり物件を探しているという話を聞きました。「それならうちの山田荘があって空いていますよ」とお伝えしたことがはじまりだったと思います。

一 ちょうど5月頃ですね。その頃、こちらは 商店街を中心に場所を探していて、商店街が 難しいね、って話をしていた時期でしたね。 山本:山田荘に引っ越してきたときはほとん ど倉庫として使われていました。そこを片付 けて5月には開ける状態になっていたので、 ここに場所があるよ、と言える時期に冠さん と出会えたのはよかったですね。木賃アパー トのネットワークをつくろうと思ったきっか けは、山田荘のような昭和のアパートが上池 袋にはたくさんあり、山田荘をただ開くだけ でなく、まちにある他の○○荘とつながりや 連携を持ちながら、このまちを形づくってき たものを使い続けていきたいと思ったことが はじまりです。Yのお話をいただいたことで、 次第にアイデアが生まれたり、考えが具体化 していきました。

山田荘を拠点にまちへ広がる アートプロジェクトへ

一 こちらのオーダーはあるようでなく、山本 山田をサポートはしつつも基本的には自主性 に任せるところもあって、なかなかやりづら い部分もあったかと思います。さらに、今回 は行政と一緒にやる難しさもあったのではと 思います。山本山田がYに参加してからの感 想をお聞かせください。 山本:参加してすぐの10月頃は、人を迎え入れられる場所にするのが大事だと思って、そこで道から見えるデッキをつくるアイデアが出ました。その結果、デッキに予算を使いすぎたので中はほとんどいじれなかったんですけどね (笑)。

中崎: けど、山田荘の内部は今のままでも特に不自由しなかったし、むしろそのままのほうが来てくれた人も新鮮な驚きがあったように思えます。

山本:最初はドタバタで、地域の人たちにアピールしなくちゃ、みたいな強迫観念がありました。地域の人に知ってもらい使ってもらいたかったので、チラシも何百枚も配りました。Yの企画を行なう中で気づいたのですが、使い方によっては地域の人が関わるものもあるけど、必ずしも地域の人がすべて関わる必要もないんだって思うようになり、そうしたら気が楽になってきて、自分たちがこれからすべきことがクリアになってきました。

一中崎さんは、当初の商店街でやるプランから山田荘でやることが決まったことついて、 どのように考えましたか。

中崎:僕は山田荘に寄り添う立場なので、山田荘がきっかけとなって、上池袋3丁目4丁目にフィールドを絞り、そのエリアの中の人でも外の人でも誰が来ても大丈夫なフレームをつくろうと決めました。それまでは「豊島区」という大きな漠然としたフレームだったものが、目指すべきフィールドがクリアになったという感じかな。

一 当初は山本さんが言っていたように、この場所を開いてみる期間として、地域の人を呼んでこのまちのいろんな話を聞いてみたり、オープンスペースとしての告知も含め地域の人たちに来てもらおうと、チラシを配ったり掲示板に貼る広報活動をやってきました。中崎さんの滞在制作「上池ホームズ計画」がは

じまってからは、地域に向けた企画と、外に 開いていく企画が分けられていたと思います。 事務局としても、そうした企画に応じて広報 のアプローチをその都度変えていました。

中崎: デッサン教室に、外の人が300人も来る必要はないんですよね。小学校でサッカーをやるときも、あそこはどういう手続きで誰に話を通したらできるのかを調べてやってみるのが目的だったので、イベント自体に外の人がたくさん来なくてもよかった。区民ひろばを使いたいと思ったときも団体登録すると使えることがわかったので、じゃあ山田荘で団体登録しておくと今後また使いたくなったときにすぐ使えるよね、みたいなことを意識的にやっていました。

逆に音楽祭や公園アンデパンダン展は、最初 から外向きのイベントとして狙っていまし た。当初は全部ゆるめに設定して、いろんな ことやって事例をたくさんつくれればいいと 考えていましたが、主催である東京文化発信 プロジェクト室(※1)や豊島区の人たちからす ると、ちょっとゆるすぎなんじゃないかと心 配されました (笑)。他にも、少ない予算でい ろんなイベントを企画しないといけないこと は大変で、いろんな意見をうまく収めること には苦労しました。それでも、僕はまち歩き をしながらいろいろと経験できたことはおも しろかったし、山本山田とはプロジェクトが 終わったあとで個人的にここを借りて展覧会 やろう、みたいな話もしていました。やはり、 なんだかんだいって今回のプロジェクトは東 京都や豊島区の事業ですし、ルールや規制が 厳しい中で行うものであったことは事実。な ので、ここでの展覧会はプロジェクトの会期 後にやろうかな、と最初は思っていたんです。 もうちょっと無茶ができる企画にするために は、インディペンデントでやったほうが合い そうだなと思っていました。結果的に、ゆる めのイベントだけじゃなくて展覧会企画もあるよって話をしたことから、年度内の企画のフレームに展覧会が加わったんですよね。でも、音楽会や公園アンデパンダン展はすごくお客さんの反応もよくてすごく幸せないい日がつくれて嬉しかった。展覧会も無事に終わったから、すごくボリュームのあるプロジェクトになったんじゃないかなと思っています。

行政と組む上で、個人が背負うべき メリットとリスク

一 山本山田は、今回のプロジェクトの間、自分たちだけではできないことを外部の人と一緒に進めていく上で思ったことや、もっとこういうことができるとか、こうしたかったとかありますか。

山田:正直言えば、私たち自身の立ち位置が難しかったですね。山本山田の自主企画もありつつ、中崎さんやとしまアートステーション構想の企画の中で、我々の振る舞いはどうしたらいいんだろうかと迷った部分もあります。ただ、それはそれとして、この期間を個人的には楽しもうと思っていました。ここで起こることや出会う人は、今後の私たちの財産になるだろうと思いながら、ほとんど身を任せながら一緒につくっていきました。

一 ここでの経験は、たしかにいろんな財産になると同時に、リスクも背負っていた側面もあったかと思います。例えば地域の人に話を通さなきゃいけないときには「こういう人とつながりたいと思っているんだけど、どうだろうか」と随時相談させていただきました。思い返すとそれは、これからもご近所付き合いをしていく必要があるおふたりに無理なお願いをしてしまったかなと思っています。

山田:でも、こういう機会がないと地域の方に何かをお願いすることもないので、それはそれでよかったです。

山本:山田の母の耳にも「山田さんち、何かやっているらしいわね」という噂が入っていたようです (笑)。よかったこととして、今回のとしまアートステーション構想の主催に東京都と豊島区という公的な存在が入っていたおかげで、町会の掲示板にチラシを貼ったりするお願いもスムーズにできました。また、山田の母が町会の役員をやっていたことも助けになりました。

一 やはり、地域に何かをしようとすると、関 係者への根回しや地元の人たちとの信頼構築 が大変ですが、行政が主催に入っていたこと で地域の人たちにとっては安心感があったの かもしれませんね。そういう意味では、行政 なしでは今回の企画もうまくいかなかったこ とが多いかもしれません。企画を振り返って 一番感じるのはパートナーの重要性です。仮 に予算がもっとあり、スペースを借りてイベ ントを企画ができても、継続して運営ができ ずに終わってしまってはあまり意味のないプ ロジェクトになったかもしれません。事務局 の立場は、パートナーを探して一緒に組んで 進めていくという中間支援でしかない。なの で、やはり地域というフィールドで何かやろ うと思う人がいないと、何も実現できないと いうことを改めて実感しました。

規模の違いが生むギャップをどう埋めるか

中崎: 先ほど、山本さんが主催に東京都や豊島 区がいることのメリットに触れていましたが、 デメリットもありますよね。山田荘自体が小 規模なオルタナティブスペースとして、いわゆるインディペンデントで小回りをきかせながら動くのが持ち味のはず。ただ、そこに行政とのやりとりが入ることで持ち味が活かせない状況になってしまった部分もある。 僕も、 プロジェクトを行う存在としていろいろと不自由に思うことはもちろんありました。もち

ろんいい部分も悪い部分もあって、区主催だからこそ区の内部を通すと話が早いこともあれば、もしかしたら一般市民が話せば通りそうなことも、課をまたいだことでこじれてしまったこともあるかもしれない。両方あるのがわかったのはよかったと思う。今後やっていくときにオルタナティブスペースであることの武器、自由と不自由な部分が見えてきたんじゃないかな。

一 小学校を使うときに、区の方と一緒に行ったら校長先生と話ができて、その場で了承が取れたこともあれば、公園の使用許可を取るのに手間取ったこともあった。同じ区のの施設を使うにしても、これだけの差が出てるとできる。ここだけに限らず、目指すベースと、まで、して山田荘のような小さなスペースと、まず、で豊島区という大きな組織が協働すると思います。山本山田さんが不自由に感じられたことを生まれた難しさはたしかに感じられたこともなければいけないことももちろんありました。

山田: そうですね。やっていくなかで、いろいろ疑問に思う気持ちもありました。我々は組織ですらなく、そもそも一家庭が行政という大きな組織と組む体制のギャップがありましたから。大きなイベントをやるような準備やルールを、小さな一軒家に落としこむことは確かです。一事務局内でもその話はよく出ていますが、行政からお金をいただいて運営していますが、行政からお金をいただいて運営していますが、行政からお金をいただいて運営していますが、行政からお金をいただいて運営していますが、行政からお金をいただいて運営していますが、行政からお金をいただいて運営していますが、行政からお金をいただいて関わらず指導される個人情報の管理やイベントの内容確認、運営における確認事項など決定稟議に時間がかかることも引き受けなければいけません。それぞれの組織が大きいため、そういうものだと

思いつつも、やはり現場の規模感との違いから、そうしたルールにギャップを感じることもありました。なので、今回結果的に山本山田も主催者側として並ぶ形をとったことで、おふたりに苦労をさせてしまったととは多み方は今後の課題だと私たちも思っています。区民の方と一緒に新しいアートステーションをつくったりアートに関われる場を増やしていくというとしまアートステーション構想を実現するために、そうした仕組みをどのように改善していくのかは、来年度以降の課題だと思います。

中崎: やはり、物件の賃料の相場とか、プロジェクト自体のスケジュールとやりたいことを考慮した予算設計から改めて見直したほうがいいと思います。今回、事故なく無事に終えてよかったと思うけど、このフレームはひとつの偶然みたいなものですからね。同じ事例をあと 10 個つくりましょう、というのには無理がある。

今後、事務局としていかに仕組みと モデルケースをつくれるか

ー そのあたりは、事務局側の報告書を通じて主催者間で共有するつもりです。今回のプロジェクトの大きな課題は、山田荘とのプロジェクトが終わった後にYをどう展開するのか、事務局が考えながらプロジェクトを仕るべきだったと思っています。中崎さんと思っています。中崎されます。なのあたりは地道な交渉や根回しを行いながら、時間をかけてじっくりやらないとできないこともたくさんある。同時に、運営主体がきちんとした意思を持ってそうしたことをやっていかないといけませんね。そして、中崎さんに対するプロジェクトマネジメントの

失敗。中崎さんにここまで負荷をかける必要もなかったと思います。たしかにプロジェクトはよかったけど、それは中崎さんの力であり、事務局がそれに頼りすぎていた部分もある。どういう形で中崎透という才能を活かしながら新しいアートステーションをつくっていくのか。山本山田というパートナーシップをどう機能させていくのか。結果論としてはよかったけど、このあたりがもう少しうまくできたのではと反省しています。

中崎: 今回はやはりかなりの特例、たまたまこういう人たちとこういう場所があって、僕やみんながいたことによるバランスでできたものだと思う。でも、同じケースは起こりえない。けれども、Yという取り組みがあったことで山田荘が助成や補助がなくても独立できる状況ができあがった。そういう意味では、今回はモデルケースになるんじゃないかな。

― 事務局の仕事はあくまでフレームをつくる こと。中崎透というアーティストがいて、山 本山田との出会えたことはすごく幸運だけど、 それが結果としてよかったというフィード バックで終えてしまうことは、事務局が成長 していくためにもよくありません。願わくば、 きちんとフレームをつくって持続可能な体制 をつくることができたらという想いがありま す。例えば、次に「としまアートステーションX」 をつくるときに今回の取り組みを参考にした いと思いますし、この山田荘で起きたことの プロセスを公開し、どういった構造的な課題 があったのかを明らかにすることで、どこか 他の地域で同じようなケースでスペースを立 ち上げようと思ったときに、今回の成果や課 題への反省が活かされれば、ひとつの社会的 価値になるのかなと考えています。としまアー トステーション構想というこのビジョンをど のように継続して体現させていくかについて もう一度考えながら、細かい仕組みづくりや アーティストとの付き合い方、予算の組み方などのノウハウをきちんと蓄積していきたいと思っていますし、としまアートステーション構想の活動に関わった歴代アーティストを集めた意見交換会もできたらいいなと思っています。

いろいろとお話が出ましたが、時間もそろそろいい頃合いなので、このあたりで終了したいと思います。みなさん、どうもありがとうございました。

2015年3月8日としまアートステーションYにて収録

※ I 東京文化発信プロジェクト室は、2015年4月、 アーツカウンシル東京に統合されました。

3. 主催者の声:としまアートステーション構想のこれから



森司(東京文化発信プロジェクト室 東京アートポイント計画ディレクター※I)

樋口英一郎(豊島区文化商工部文化デザイン課) 佐藤慎也(一般社団法人オノコロ代表理事、日本大 学理工学部建築学科准教授)

インタビュアー:としまアートステーション 構想事務局

としまアートステーションYを通じて 感じた課題

一 今回は、としまアートステーション構想がとしまアートステーション Z (以下、Z) からはじまりとしまアートステーション Y (以下、Y) に取り組む一連の動きで、主催者として見えてきた課題や、今後どのように進めていくのかなどについて話していけたらと考えています。

まずは佐藤さんから、オノコロとしてスタートして I 年半ほど活動してきましたが、あらためてとしまアートステーション構想の掲げているビジョンや今回 Y に踏み込んだことを

振り返ってもらえたらと思います。

佐藤:としまアートステーション構想は、「アートステーション」と呼んでいるものを区内に行政が場所やプログラムを用意してつくるのではなく、区民の自発的な動きにより立ち上げ、つくられていく仕掛けができないかと考えながらやってきました。

それまでは、具体的なモデルケースとしてこの雑司が谷にある Z を中心に活動することしかできていなかったので、Y という別の場所をつくり、そこで活動をはじめることが今年度の目的でした。まずは Y のプロジェクトとして場をつくれたことはよかったと考えています。その上で、それがはたしてどういう意味があったのかについて、みなさんと話ができればと思っています。

一 当初は商店街をフィールドにいろいろと 探ってはいたものの、結果として遊休不動産 のアパートによるプロジェクトになったこと が、はじめの設計とアウトプットとの大きな 違いだったと思いますが、いかがでしょうか。 **樋口**:個人的には、商店街は人通りがあるけれど制約も多かったのだと思います。結果論的になるかもしれませんが、区でも遊休不動産については問題意識を持っていたので、今回の取り組みを通じて事業が行えたことはよかったと考えています。

一 森さんは、東京都が推進している東京文化 発信プロジェクトを通じて、としまアートス テーション構想を発展させていこうと考えて いると思います。今回、こうしてまちなかに 出て行き、山田荘でプロジェクトを実施した ことについてどう考えていますか。

森:総論としてはよかったと考えています。 アートステーションという言葉をどう定義づ け、どう具体化するかが構想の本質的な課題 だったと思います。さらにそれを複数の拠点 にしていきながら新しいアートステーション のイメージをつくろうとする意味において、 まちに出ることはひとつの目標でした。たし かに場所をつくる上で商店街はイメージとし てあったけど、「いやいや、池袋ってそういう 場所だけじゃないところもあるよね」という 考えのもとにプロジェクトを進めてきたなか で、山本山田と出会ったことは、すごく重要 なものでした。結果的に、当初こちらが見据 えていた目標と山本山田が抱えていた課題意 識がつながったことが、一番大きい成果なん じゃないかと僕は思っています。

人を探すか、場所を探すか

一施設や空きスペースをアートステーションとして活用しようとしたときに、アートステーション自体で収益をあげ、その収益で運営できる体制をつくろうとすると、一般的な物件で場を運営しようとするのはかなり難しいものがあるのはたしかです。そうした意味で、今回山田荘と出会い、こうしてプロジェクトを実施できたことで、アートプロジェクトの

幅に広がりが出たと言えるかもしれません。 もちろん、まだまだモデルケースと呼べるも のではないかもしれませんが、何かしら見え てきたものがあったのかなと。

佐藤:はじめは場所・活動・人といった3つ の要素があって、余っている、もしくはあま り使われていない不特定の場所や、活動はあ るけどあまり成果が出ていないところに場所 を提供することを想定していました。そこで、 最初に商店街という場所を選び、そこからアー トステーションができるのでは、といった箱 の考えが先行していた。けれども、システム 的な切り分けが、Yを立ち上げる困難さを生 んだような気がします。最終的には、やはり 強かったのは「人」だったという、今になっ てみれば当たり前な結論なのかもしれません が、そういう人が豊島区民にいて、うまく出 会えたことが今回ある意味で成功した大きな 要因になっていると思っています。とはいえ、 人だけ探せばいいかというときっとそうでは ない。今後この事業を続けていく上で、事務 局側がYを通して見えてきた大きなポイント は、その方法論をもう一度考え直さなければ いけないところにあると考えています。

森:実は、佐藤さんはこうしたやり方を知らないわけではなくて、数年前に僕と一緒にまちを歩いて場所を見つけ、そこで芝居をつくるプロジェクトを実践しているんですよ。

佐藤:そうですね。

森:学生とアーティストによるアート交流プログラムで実施した「戯曲をもって町へ出よう。」というもので、アーティストと学生が一緒に劇場の外で演劇をつくるプロジェクトでした。僕たちは何か新しいことをしなきゃ、と考えてしまう傾向があるのではと思っています。実はそんな新しいことではなく、以前からやっていたものから参考にできる部分はたくさんあるわけなんですよ。さらに言えば、

池袋に木造住宅密集地域の問題があることは 区の担当者も知っていて、担当部署は違えど もどうにかしなきゃという問題意識はあった。 建築的にも木造住宅密集地域の問題は明白で、 そんなまちなかでプログラムを展開する手法 もすでに僕も佐藤さんも知っている。でも、 アートステーションをつくろうという話に対 してどこか身構えすぎたのかもしれません。 自分たちの手元にあるソリューションをもと に現場の課題に対してダイレクトにぶつかっ ていくことで、よりスムーズに地主さんやオーナーさんたちとの関係性の取り結びができた かもしれません。

樋口:最初はやはり、拠点にこだわっていたというか、場所に引きずられたところはあったと思います。けれども、いざパートナーが見つかってみれば、結局は「人」だったところが、やっぱりそうかと納得してしまいました。区としては、地元の方が入っていただいて、いろんなものがどんどんつくれたことはやはり成果のひとつだと思っています。山本山田自身の活動として4月からは独立する形と関わったという経験は、何かしらの形で次に活かしていきたいですね。

山本山田とYとの関係の今後

森:山本山田との関係もこれで終わりではなく、新しい関係になるという意味では、ひとつの節目だと考えるといいかもしれませんね。 **樋口**:そういう意味では、区民の方が自主的に活動する当初の目的にはなった気はします。 森:彼らだけでそのままではスタートは切れなかった可能性はあるので、それは後押しできたと思いますね。

佐藤: 当初の予定では、もう少し継続していきながら今のような互いに独立した関係をつくるプランでしたけど、もともとこの事業が

なくても彼らが独自にいつかははじめる可能性があった。それがこの半年間を経て、彼らをサポートして一緒にプロジェクトをつくっていったことで、彼らだけでいろんなことができるところまで押し上げることができたのかもしれません。

ー としまアートステーション構想は、もともと今回の山本山田のようにパートナーを探し、その人たちの主体的な活動をサポートしていく方法論をつくり出していくことが目的です。 Yを踏まえ、今回のような形で区民によるプロジェクトが新しくスタートを切れた意味では成功しました。その一方で、としまアートステーション構想の企画をこれから展開していく上で検討しなければいけない課題はありますか。

森:僕の立場から言うと、Yはとしまアートステーション構想の概念を提示したプログラムだったという意味で、構想のあり方をすずくきれいに体現してくれたと思っています。今後は共催関係ではなくなり、また我々も回いた関係性はこれからのプロジェクトに関係性はこれからのプロジェクトの経験しても継続していくでしょう。今年度の経験をもとにお互いがスムーズに次のステップを踏めるようになったのではと思います。形はともととしまアートステーショば、すごく良い形のモデルケースだと思っ増えることはもっとあるべきだと思います。

佐藤:全体の話で言えば、事業として考えたときにはどうしても企画が単年度で、その年度の最初の時点でその年の事業計画を具体的につくらないといけません。けれども、4月に描いていた事業計画とは最終的には違ったものができあがった。それでも「成功した」と言えるのは、「豊島区にアートステーションを

つくる」という根本的なところをみんなが外さず、何か問題があったときには自分たちの軸に常に立ち戻っていたからこそ、結果的に目的が達成できたと言えるものになったと考えています。当初の表面的な、自分たちで場をつくって運営することに縛られていたら、もしかしたらこういう結論には達しなかったかもしれません。この大元を外さないことを理解して、ある程度企画が右往左往しても大夫な設計が必要なのかもしれません。

森:区が共催者だったことは最大の強みですね。なので、目的に対しての道筋であれば手段に関して寛容になれたんだと思います。同時に、これこそがこのプログラムのスキームの最大のポイント。とはいえ多くの場合は「年度の予定と全然違うじゃないか」と指導が入るはずなんですよ。しかし、そうではなくもっと大きなフレームをやるための試作だということを文化事業として理解している区の成熟度がそれを支えたのではないでしょうか。

樋口:たしかに、細かいことを言えばきりはありませんが、基本的に区は、ある程度寛容さを持って企画を推し進めていこうという気概はあります。もちろん、法に触れることはやってはいけないとか、区の問題でできない部分もありますが、基本的にはアートステーションをつくるというコンセプトをきちんと実現するために動くことが、区としてのサポートの姿勢だと考えていました。

場をつくるために必要な区と 地域住民との関わり方

- Yの事業を振り返ったとき、まちなかで継続的にプロジェクトを行ったことで幅が広がったと思っています。もちろんそれはアーティストの方針もありますが、公共空間にアクセスするために、どのように地域との関係

性を持ち、ビジョンや仕組みを共有しながら 実行していくか。公共的な場所を使うとき、 まちの人が応援して了承を得ても、行政の許 可が下りないということもあります。ただ、 今回は区が積極的に他の担当課への交渉をし てくれたおかげで、短い期間でもスムーズに 実行できたところもありました。

樋口:一般的な区などの自治体のスタンスとして、その場所で何をするかに目が行きがちですよね。しかし、今回も小学校や公園などを使ったイベントを通じて、やはり人がネックでやりたかったことが一部できなかったこともあらためて認識させられました。人に対してもケアしていかないと、やれると思ったものもやれなくなることがある。これも反省のひとつですね。まだまだ都会であっても地縁は強いと実感しました。

- アートステーションをつくるときに、当初の話のように場所を先につくっていくという方法論はやはりできないのか、それとも違った方法論がありうるのでしょうか。

森: さきほど、人に出会ったという話になり ましたが、その出会った人が今回は場所を持っ ていたことは事実。単に人に出会って「僕も やりたいです」というだけではやはり難しい。 そういう意味で、人に出会ったと同時に場所 に出会ったとも言えるかもしれません。だか らこそ、場所を持っている人が「ここに場所 がありますよ」と手を挙げてくれることが僕 は重要だと思います。なので、今後の展開と して「拠点の公募」もありだなと考えるよう になりました。要するに「場所はあるけど何 かしたい、どうか一緒にやれないか、誰かや りたい人いませんか」と公募することも選択 肢として持っておくことが重要だと思います。 もちろんこれは、今回の豊島区のプログラム に限らず、東京都のアートポイント事業とし て、公募事業の設計として検討していきたい

と考えています。2020年には東京オリンピックも開催されるので、各地にいろんな拠点が必要になってきます。そのためのヒントをもらえたと僕は思います。

佐藤: その一方で、思った以上に都心における商店街や商業的な空きスペースの利用の難しさを実感しました。地方であれば、人がいて何かを仕掛けることで地域が活性化する可能性があるということはわかりやすいですが、都心部は違った論理が働いているように思えます。場所が先にある方法も可能性としてはあると思いますが、場所を持っている個人とうまくつながらないと、このとしまアートステーション構想は、少なくとも豊島区という土地ではやりにくいと実感しました。

- 場所か人かだけではなく、その場所にちゃんと人が根付いていて、その人ときちんとつながれることが前提になってくるのかもしれませんね。

佐藤:そうかもしれませんし、そうではないかもしれません。まだわからないですね。場所と人をリンクさせることが、もうひとつ別のミッションになってくるのかもしれない。つながっているものだけを見つけるのではなく、場所と人がバラバラになっているものを結びつけることが、もしかしたらこの構想において考えなければいけない、やらなければいけないことかもしれないですね。

一 例えば、場所を持っているおばあちゃんが「何かやってほしい、でも自分ではできないから誰かできる人を連れてきてほしい」と。そこで何かアーティストなり、コミュニティをつくりたい若い人をその場所につなげて、スペースをつくるということがあるかもしれません。そのときに、その場所の所有者を見つける方法として、公募というのはたしかにひとつの選択肢かもしれませんね。だけど、その手を挙げる人が商店街のような場所ではない気も

します。もちろん、すべての商店街をまわったわけではないので断定はできませんが。

商店街以外でアートプロジェクトは できるのか

森:全国的には、商店街でアートのサポート を必要としている事例は山ほどあります。逆 にその事例に引っ張られて商店街しかない。 とこちら側が前提として考えていたのかもし れませんね。むしろ、個人宅にアプローチす るなんて恐れ多くて、「それはないでしょ、空 き家でしょ、やはり」とこちら側が思ってい たわけなんですよね。なので、今回のように 現役で住んでいらして、住み開きでかまわな いと言っていただいた、山本山田というオー ナー側の大胆さというか、逆に言えば驚きで すよね。自分たちが勝手に制限をかけて本当 にアプローチしなければいけないところに メッセージを届けきれていなかったという間 違った遠慮があったのかもしれません。ここ で得た教訓は、もっとちゃんと届けなければ いけない人たちがいる、ということを学ばせ てもらったことですね。

- アートステーションをやるためには商店街 しかできない、という固定概念はどこからく るのでしょうか。

佐藤: 規模に対する遠慮ですね。やはり、アートステーションというものを考えたときに、 規模がなければいけないという考えがあった のかもしれませんね。

一 アートステーションを大きな施設で行うという考えに立つと、やはり今回の山田荘のような個人宅ですごくミニマムなものが果たしてアートなのか、ある程度の規模がないと人を呼んだり巻き込んだりすることができないのでは、という考えはたしかにあるのかもしれません。

森:でも、今回の中崎さんの展覧会のツアー

で山田荘に待機しているとき、コタツがあったじゃないですか。四畳半文化じゃないけどそこにはコタツ文化があって、それも文化じゃないかとあらためて実感したんですよ。あえて言えば集客のコントロールをどうするかぐらいで、あれを適性規模だというのか、それとも失敗と呼ぶのかはひとつの価値判断の問題でしかない。それは、プログラムの設計として1日の集客数に対してどうしたら無理のないオペレーションができるかの計算をするだけだと思います。

佐藤:けれども、山田荘に辿りついて6畳2間を見たときに、本当にここでいいのか、物理的にここでいいのかと思ったことはありましたね。

樋口:ためらいは確かにありましたね。

森:でも、あれって何にためらったんでしょ うね。

樋口:やはり、頭の中ではその場所で何ができるのかを最初は思ってたんでしょうね。そうするとキャパシティの問題とかに目が向いてしまう。

森:それを中崎さんがひっくり返したんだよね。 **佐藤:**そうですね。

森:まちに広がること、だからここが拠点なんだ、とアーティストがマイナスをプラスにひっくり返したという意味で、中崎さんにはいい仕事をしていただいたと思います。パートナーとの新しい関係構築のフェーズに入った。

佐藤:次回以降どうするかという重要なポイントとして、今回のように個人と組むことの難しさが挙げられます。個人でやることと、こうして大きなフレームの中のひとつとしてやることの違いや互いの役割、その後の可能性をもう少し見極めて、来年度以降のプロジェクトにつなげていく必要があると思っています。

森:これで完全にお互いに今後も交わらない

関係なのではなく、4月以降も彼らに対して 御用聞きに行くことに意味があると思います。 山本山田も、彼らにしてみれば、今回のプロ グラムのようなドライブがかかったオペレー ションの上に乗っかって生まれた部分も大い にあるのではないかと思います。山本山田が 自分たちで運営の方法論を持っているかとい うとそうではないかもしれません。実際に自 分たちだけで運営していくときにうまくいか ないこともあるかもしれません。そんなとき には、うまく御用聞きとしてご近所付き合い の形で助けに行く。互いの信頼の構築と同時 に、互いに揺るぎない関係がつくられていき ながら、そこではじめて互いにとってメリッ トのある、やらされ感がなく、互いにおんぶ に抱っこでもない、いいパートナーシップが 生まれるようになるのでは。それによって、 はじめて地域に根ざしたアートステーション が生まれるのではないだろうか。今回離れた ことが、単に縁が切れたわけではなくて新し い関係構築のフェーズに入ったと考えながら、 どう互いにコミュニケーションを取っていく か、どのようにうまくケアしていくかが NPO の技量が問われることでもあるのかなと。Y のプログラムも山本山田も、これからが本当 のスタートだと思うんですよ。

佐藤: たしかに、どういう状況になったら新しい関係に入るかを見極め、どのように互いにコミュニケーションを取っていくか。こちら側は、さまざまな想定や状況を考えておく必要がありますね。

森:はじめは個人や団体とパートナーを組んで一緒にやりつつも、その後きちんと独立する流れをつくり、うまく軌道に乗せる後押しをしてあげる、ある種の入学と卒業がある事業なのかもしれません。その上で、どういうふうに卒業するのかを考えることですね。

生活圏にアートを溶けこませること

一 地域と根ざしながら、継続的なプロジェクトが安定的に生まれていく形があるかもしれませんね。例えば、アンデパンダンを一緒にやった学生たちが、もう I 回やりたいって仮に言い出したとき、「あとはそちらでやってください」って突き放すんじゃなく、ご近所付き合いをしながらうまく一緒にやっていくような、そうした各地でつくられるアートステーションのハブになるような存在としてこちらもうまく立ち振る舞う必要があるかもしれませんね。

集客の話で、集客数ではなく、ご近所のおば あちゃんが来たりと、まちなかにたくさんチラシをまいたりしながらご近所さんとの関係 を紡いでいくことで、これまでのアートがま ちなかに異物としてやってきて去っていくや り方ではない、違った形でうまくまちなかに 溶け込んでいく着地の仕方があったように思えます。

森: あれは中崎さんのうまさだよね。まち歩きの設定もうまかった。よくあるガイドさんが先頭行って「はいこれです」っていうようなまち歩きではなく、とりあえず歩けっていう放置さ加減が新鮮でしたね。中崎さんのあのゆるさがあって、あそこまできれいにズラしてもらうと、怒るんじゃなくてそういうものだっていうことのサインは通じていて、それを楽しむ時間として過ごすことができる。

佐藤:そうそう。やはりそれは、まちの切り取り方としてルートの設定もうまかったと思いますね。

森: 距離感の話として、タッチするゾーンやエリアが、これまでのアートプロジェクトは大きすぎると僕は思っています。 越後妻有なんかを含めてかなり大きなものがひとつのアートプロジェクトのシンボルみたいなもの

になっていて、みんなそういうものだと思っ ている気がします。けれども、今回のYのプ ロジェクトでタッチした範囲って、ものすご く小さな猫パトロールのような距離感なんで すよね。猫はああやって毎日パトロールしな がら、今日のまちは元気だとか、今朝はいつ もとちょっと変わった様子だったな、という ことを敏感に感じ取っている気がします。そ れは猫だけでなく、人間の生活圏も実はそん なもんなんじゃないかなとも思います。その 生活圏におけるプログラムが見えたのは、ま ちを元気づけるのではなく、まちをケアして、 まちをちゃんと見てタッチしていくプログラ ムという意味で、今回の取り組みは今後のプ ログラムのあり方として、もっと定着すると いいなと思います。

一 コースの設定は、最初にまち歩きをしたと きに山本山田が普段動いているところをベー スに、中崎さんが見立てをしていくものでし た。そこには、やはり山本山田の存在、そこ に住んでることで見える風景に対してアー ティストがうまくつくりあげたところが大き かったと思います。地方のアートプロジェク トにおける商店街などでは、自分たちの生活 も含めて良くも悪くも自分たちが元気になら ないといけない、というマインドはあると思 います。けれども、それを都市の真ん中でい きなりやるのはハードルが高い。実際、私た ちがリサーチした商店街で結局実施できな かったのも、そういった商店街を元気に、と いったようなものが通用しなかったところな のではと思っています。森さんが先ほど話を されていたように、アートプロジェクトは地 方で立ち上がって成長してモデルケースと なったイメージがありますが、それを都市部 に落とし込む設計の仕方は、やはり考え直す 必要がありますね。

森:仕掛ける側も、アートの考え方に対する

品揃えをもっと豊かに持っていないと、ハー ドなアートばかりだと中崎さんみたいにいい 意味で脱力した表現を評価できなくなる恐れ がある。ハードなアートが含んでいる、交感 神経が活性化して緊張を強いるようなもので はなくて、副交感神経的なリラックスしたアー トプログラムも同時に必要なのかもしれませ ん。特に生活圏に入ってくるとなると、ただ でさえストレスが多い社会で、普段から緊張 を強いられているところに対してストレスを 与えるのではない、アートが日常に溶け込ん でいくようなものも含めて、もっとアートプ ログラムの可能性の幅を広げておく必要があ ると思います。そのことを仕掛ける側がどれ だけ自覚的になっているかによって、質的な コントロールは変わっていくので、経験も求 められてくる気がします。

行政、NPO、まちの人たちが独立できる 関係に向けて

一地域の状況を踏まえた上で、日常を非日常につくり変えていくことではなく、日常を考えがアートプロジェクトには必要かもしれませんね。最後に今後のことについてはじめて実してさた上で、サポートのレギュレーションを含めて、次の新しいパートナーをどうが入れるのかをきちんと考えていくレベルのパートナーに対して、行政的な論理やルールを当す。特に、今回のような個人レベルのパートナーに対して、行政的な論理やルールを当てはめていくのは彼らだけでなくこちらもップを組む上でのルールや体制づくりについて、みなさんはどうお考えでしょうか。

森: 一番簡単なのは NPO の独立ですね。都や 区といった自治体に縛られず、NPO が NPO と独立してアートステーションのサポート をしていくケースをつくることができれば、 NPO のルールである程度柔軟な対応で進めて いけると思います。そうすると、細かなこと で行政側も対応しなくてよくなります。現在 のように NPO がアートステーションの現場を サポートし、都や区が NPO をサポートしてい る距離が近い関係も、どこかのタイミングで どのように切り離していくかを考えることが 大事だと思っています。都や区が関わること による難しさがあることを指摘してもらいま したが、それすらも全部とっぱらうことがで きれば解消できるわけです。自治体とは切り 離されたところで、NPOがきちんと活動でき るフィールドをつくる。じゃあ、それをする ためにはどういう工夫がいるのか。そのため の大きなフレームづくりを一緒に丁寧に議論 していきながら、それの実現に向けて策を打っ ていく必要があると思います。

樋口:行政でできない部分を民間にお願いする考えは、区も持っています。しかし、今回は初回ということもあり、やはりみんなぞれがいいところばかりを追い求めすぎたのかなと思っています。Yのケースでは地元の方が関わる形はつくれましたが、地域でロジェクトをやっていくための細かい根回しをショートカットできたというわけではなかは、先ほどの御用聞きの話ではないですが、我々も必要なときにきちんと前に出て動かないといけないな、という反省になると思います。

佐藤: NPO が独立して活動していったときに、では最終形がどうなるかというと、やはりまちの人たちと NPO が一緒に活動する関係なのか、それとも NPO 自体も離れ、地元の人たちが自覚を持って活動していくことが本当のゴールなのか。おそらく後者が理想型だと思ってて、NPO がサポートすることすら必要なくなる日がくるのかもしれませんね。

森:このプログラムが何に変化を起こそうとしているのか、どの価値観をどう書き換えて、次にどういった提案をしようとしていかをあらためて確認ができたプログラムだったと思います。こうした目的と今回の経験をのように自分たたまのかを考えることが重要だと思て得ます。今回、中崎さん自体も経験を通じてが手にする成果だけでなく、NPOとしてどういいする成果だけでなく、NPOとしてどういいする成果だけでなく、NPOとしてどういいするにとで他のNPOとの共有ができ、さらにそれを外に伝えていくことができる感覚を持てることが大切ですね。

一 あらためて、当初の想定とは違った結果になっていく過程を経ながら、地域に対するアートの関わり方やアートに対する位置付けを模索できたプロジェクトだったと言えると思います。今回の Y だけでなく、としまアートステーション構想という大きなものに向けたフィードバックをきちんと行いながら、次につなげていきたいですね。今日はありがとうございました。

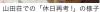
2015年3月13日 としまアートステーション Z にて 収録

※ I 東京文化発信プロジェクト室は、2015年4月、 アーツカウンシル東京に統合されました。 4. としまアートステーション Y のその後: 木賃の余生の楽しみ方(考)



としまアートステーション Y のその後:木賃の余生の愉しみ方(考)







公園に隣接して建つ「くすのき荘」

山本直(山本山田、ヤマモトアトリエ主宰) 山田絵美(山本山田、市民社会創造ファンドプログ ラムオフィサー)

はじめに

2014年にとしまアートステーション Y (以 下、Y) をめぐるプロジェクトに参加したこと で、上池袋という地域や山田荘について考え ていたことが、ひとつの具体的なものとして 現れたように思います。私たちは、このプロ ジェクトがはじまる前から所有する木造賃貸 (以下、木賃) アパート「山田荘」の活用を通 して、この地域に眠るたくさんの木賃をおも しろく使えないかと構想していました。

Yでは、山田荘という小さなアパートの一 室が、プロジェクト拠点となり展覧会場とな り、アーティスト・中崎透さんのレジデンス となり、さまざまな顔に変化しました。そして、 木賃とまちを横断するプロジェクトが展開し ていきました。その中で、木賃とまちは、もっ といろんな形で楽しく使えるのだ、というこ とに改めて気づかされました。

このアートステーションYの経験を経て、 現在に至るまでの間、それがどのように展開 していったのか、木賃アパートのオーナーで もある私たちの考えも含めて、お伝えしたい と思います。

山田荘の展開 入居者 長島確のつくりか た研究所~大家の立場から~

2015年度は、Yからのご縁もあって、山田 荘のⅠ、2号室を『長島確のつくりかた研究 所:だれかのみたゆめ(以下、つくりかた研 究所)』(※I) の拠点として | 年間貸し出すこ ととなりました。私たちはYのときのように 共同主催というわけではなく、大家という立 場で関わりました。25名程度のメンバーがい る中で、狭いアパートの一部屋を快適におも しろく使っていて、工夫している様子がうか がえました。たとえば白々しい蛍光灯にピン クのセロハンを被せて雰囲気を出したり、天 井からレールを吊ってオモチャの電車を走ら せてみたり、大きなドリームキャッチャーを 窓に飾ってみたり……。

2016年3月に開催された、プロジェクト成 果の発表イベント「休日再考!」では、受付 や展示台など、山田荘にある日用品や家具を 上手く使っていて、Yのときとはまた違った

劇場空間のような仕上がりになっていました。 3月末の退去時には、所員の方から「寂しい」 「名残惜しい」といった声も聞かれて嬉しく思 うとともに、物事を試行錯誤したりプロジェ クトを生み出した場というのは、どのような 場であれ愛着が湧くものだなと思いました。 山田荘は、現在、山本山田の住まいとプロジェ クトルームとして使用していますが、今後は シェアアトリエとして貸し出す予定です。そ して後述する「くすのき荘」と、それぞれの 木賃の機能を上手く使い合う関係をつくりた いと考えています。

くすのき荘との出会い

山田荘は、I、2号室の他に、山本山田のプ ライベート空間として2階の2部屋を利用し ているのですが、山田荘のシェアアトリエ化 を進めるためにも、この2部屋を空ける必要 があります。そこで見つけた引っ越し先の候 補が「くすのき荘」です。山田荘からは、徒 歩2分程度で同じ町会内にあります。

くすのき荘は、1975年築の木造2階建。1 階は倉庫、2階は住居といういわゆる下駄履き 住居(※2)で、広さはLフロアで90㎡ほど あります。もともとは運送会社の倉庫兼住居 として使われていました。| 階の倉庫は天井が 高く、がらんとした空間になっていて、2階の 住居部分は、6畳が4部屋+キッチン、風呂、 トイレという間取りになっています。山田荘 と比べると2倍ほどの大きさで、1階も2階も、 空間が仕切られていない分、余計広く感じま す。立地としては、東武東上線北池袋駅から 続くメインストリートに面しており、建物に 隣接して広々とした防災公園「上池袋くすの き公園」があります。

この建物が賃貸に出ているのを見つけて、す ぐにその不動産屋さんに連絡を取りました。 内覧させてもらうと、建物の2面が公園に開 けており、窓を開けると公園の賑やかさや、 ゆったりとした時間が感じられました。

「いわゆる木賃アパートにはない大空間、大人 数が参加するワークショップやパフォーマン ス・イベントができるかもしれない。木賃× 公園という関係性から新しい何かが生まれそ うだ。例えば、公園を庭に見立ててアクティ ビティを拡張する、あるいは、ここが公園の 機能を補完して、公園をより楽しく使うため の公共スペースになるかもしれない」そんな 妄想が膨らんで、「ここはおもしろく使えるに 違いない!どうしてもここを借りたい!!」 と、思うようになりました。

実は、不動産屋さんは、一階の倉庫部分のみ を「倉庫」として貸し出しており、2階はそ のオマケという位置付けでした。しかし、こ んなオモシロ物件を逃すわけにはいきません。 何とか頼み込んだところ、2階部分のみを全面 改修可能物件としてお借りすることができま した。

ちなみに、「くすのき荘」という名称は屋号 であり、「上池袋くすのき公園」との関係を大 切にしていきたい、という思いを込めて名付 けたものです。

くすのき荘、とりあえずオープン

さて、場所はあるけれど、妄想を実現する ためのコンテンツはどうするか。使い方が決 まらないと棟梁(川本)も設計ができません。 一部は山本山田の居住スペースになるけれど、 その他のスペースをどう使うか。実際に空き 家や空き店舗を活用している事例を調べたり、 民間でスペースを運営している仲間たちに話 を聞いて回ることにしました。

使い方としては、展示空間、コワーキング スペース、アトリエやシェアオフィス、シェ アキッチン、コミュニティカフェなど、さま ざまなものがありました。運営方法は、実行



くすのき荘2階から公園を望む

委員会形式かオーナー・利用者形式か。いろいると見聞きする中で、スペースひとつとっても、その地域やメンバーの属性・考え方によって、建物の様相やプロジェクトの方向性がまったく異なることが改めてわかりました。

その上で上池袋という地域において、山田 荘やくすのき荘を通して私たちが目指すとこ ろはどこなのかを考えて悶々とする日々が続 きました。ただ、あまり考えるばかりでは進 まないので、前述したつくりかた研究所の山 田荘でのイベント「休日再考!」に合わせて、 とりあえずくすのき荘をプレオープンさせて みよう、ということになりました。このとき、 くすのき荘は、壁と天井を取り払っただけの 状態でしたが、実際にここに来たお客さんが どのような反応をするのか、見てみたいと思っ たのです。

イベントのテーマが「休日」だったので、くすのき荘では、となりの「くすのき公園」を借景としながらコーヒーブレイクを楽しんでもらう企画を行うことにしました。室内には、まだ家具も何もないので、建物から取り払った廃材を使い、建具でカウンターを、柱や梁で椅子をつくり、引き出しの棚で本棚を設えました。壁にはYのときの思い出の品々



くすのき荘オープンラウンジ Photo by Yohei Kameyama

を飾り、コーヒーは少しばかりこだわって淹れました。

企画といっても、特段刺激的な要素のない「ただ居る」ためだけの時間とラウンジ空間を 提供しただけでしたが、40名ほどの方が来場 しました。皆さん立ち話をしたり、椅子に座っ て本を読んだり、ぼんやりしたり……。そう やって思い思いの時間を過ごしていて、やは りゆったりとした、この場所ならではの使い 方があると思いました。大きな視点で考える と、日本の都市においては、場所が機能で区 切られており、このように特に目的を持たず に"のらりくらり"できる空間というのは、案 外少ないのかもしれません。

2016年5月現在、くすのき荘の全面的な改修工事はこれからです。今年中には正式なオープンができるよう準備を進めています(あくまで予定ですが……)。具体的な使い方については乞うご期待ということで、最後に今の私たちが考えている構想「かみいけプロジェクト」の紹介をして終わりたいと思います。今現在の意思表明ということで、ご覧いただけたら幸いです。

【かみいけプロジェクト】

-木賃の余生をクリエイティブに愉しむ-木賃アパートは、働き盛りが過ぎた人の よう。

長年働いたから体は、くたびれているけれど、まだ動けそう。

昭和の時代に建てられた木賃物件は、生活の場としての最盛期を過ぎた今、役割を終えて、いずれは新しい建物に建て替えられるのでしょう。

機能が足りなかったり、ガタがきていたり、現代の住まいとしてみると、いろいろ不具合があるかもしれない。でも、住まう以外にも工夫して使ってみたらどうだろう。そして、足りないものは、まちもうまく使ったら楽しいかもしれない。

そこから生まれるクリエイティビティや 創造的な関係性もあると思うのです。

うまくつきあって、せっかくだから、一 緒に楽しく余生を過ごしてみたいと思い ます。

わたしたちは、山田荘とくすのき荘を使 う経験を通して、木賃の余生を楽しむ場 を耕していきたいと思います。

まだまだ、まちなかには、たくさんの木 賃が眠っています。木賃 \times \bigcirc \bigcirc 。夢は広 がるばかりです。

山本山田と愉快な仲間たち

- ※ | 主催:東京都、アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)、一般社団法人ミクストメディア・プロダクト
- ※2下層階を商店や事務所とし、上層階を住宅 とした建物。

付録:事業概要

付録:事業概要

としまアートステーションY

期間:2014年4月~2015年3月

会場:豊島区内

主催:東京都、豊島区、アーツカウンシル東京 (公益財団法人東京都歴史文化財団)、一般社団法人

オノコロ、山本山田

拠点整備プログラム

I. デッキ制作と黒板制作

制作期間:2014年10月~11月

場 所:としまアートステーション Y

中崎透プログラム「上池ホームズ計画」

l. オープンハウス

開催日:2014年11月13日(木)19:30~21:00

2014年11月15日(土)13:00~18:00

2014年12月 6日(土) 11:00~16:00

2014年12月 7日(日)11:00~16:00

場 所:としまアートステーション Y

参加者数:11月13日 オノコラー2名、一般来場者7名、関係者6名

| | 月 | 5 日 オノコラー | 名、一般来場者 5 名、関係者 3 名

|12月||6日||オノコラー4名、一般来場者3||名、関係者9名

|12 | | 7 日 | オノコラー | 名、一般来場者 45 名、関係者 6 名

2. 中崎透の YY (わいわい) デッサン教室

開催日:2014年12月13日(土)10:00~12:00/13:00~15:00

場 所:区民ひろば上池袋

参加者数: $10:00 \sim 12:00$ オノコラー 4 名、一般来場者 1 名、関係者 5 名

| 13:00 ~ | 15:00 オノコラー3名、一般来場者 | 名、関係者5名

3.2015 新春書き初め会

開催日:2015年1月10日(土)13:00~16:00

場 所:としまアートステーション Y

参加者数:オノコラー3名、関係者4名

4. 上池 CUP

開催日:2015年1月11日(日)10:00~12:00

場 所:豊島区立池袋第一小学校体育館

参加者数:オノコラー8名、一般来場者(上池FC)30名、関係者5名

5. 上池ミュージックアワー

開催日:2015年2月1日(日)13:00~15:00

場 所:豊島区立池袋第一小学校多目的室

参加者数:オノコラー7名(出演者4名、運営3名)、一般出演者15名、一般来場者21名、

関係者9名

6. 公園アンデパンダン in 豊島

開催日:2015年2月15日(日)11:00~15:30

場 所:堀之内公園

参加者数:オノコラー3名、一般出展者2|名、一般来場者35名、関係者5名

7. Practice 大きな家に暮らすための9つの方法

開催日:2015年2月20日(金)、2月21日(土)、2月22日(日)、2月27日(金)、2月28日(土)、3月1日(日)、3月6日(金)、3月7日(土)、3月8日(日) 各回II:00~I7:00 ※2月22日、3月1日、3月8日には各々ゲストを迎え、ギャラリーツアーとトークを行った。

場 所:としまアートステーション Y 他

参加者数:オノコラーのベ 17 名、一般来場者のべ 136 名、関係者のべ 49 名

シンポジウム

開催日:2015年1月25日(日)15:00~17:30

場 所:豊島区民センター (コア・いけぶくろ) 5 階音楽室

登 壇 者: 佐藤慎也、山本山田、中崎透、宮崎晃吉、小川希、石幡愛

参加者数:オノコラー8名、一般来場者 103名、登壇者(関係者を除く)2名、関係者 18名

としまアートステーション構想

主催: 東京都、豊島区、アーツカウンシル東京 (公益財団法人東京都歴史文化財団)、一般社団法人オノコロ

協力:日本大学佐藤慎也研究室

■としまアートステーション構想とは

豊島区民をはじめとする多様な人々が、区内の魅力あふれる場所で地域資源を活用し、当事者として主体的にアート活動を行い、その活動がさらに多くの人々の主体性を生み出す。そんな新しい公共活動のあり方を目指し、個々人の自発的なアート活動を支援することで、地域や人々の想いをつなげるシステムづくりを目的としています。自然に発生したささやかなアート活動が結び付き、人や街とともに暮らすことができる、そんなきっかけをつくり出すための文化事業です。 本事業は、豊島区文化政策推進プランのシンボルプロジェクトである「新たな創造の場づくり」のプログラム及びアーツカウンシル東京事業「東京アートポイント計画」の一環として、東京都、豊島区、アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)、一般社団法人オノコロの連携により実施しています。http://www.toshima-as.jp

■豊島区の文化政策とは

豊島区は 2003 年 3 月に策定した「豊島区基本構想」のなかで、文化によるまちづくりを基本方針の柱の一つとして位置づけ、2005 年 9 月「文化創造都市宣言」、2006 年 4 月に「豊島区文化芸術振興条例」を施行、区民・NPO 法人・企業・大学等地域の人々とともに、「文化の風薫るまち としま」の実現に向け、様々な文化施策・事業を展開しています。このような長年にわたる取り組みが高い評価を受け、2009 年 1 月に東京都で初となる「平成 20 年度文化庁長官表彰〈文化芸術創造都市部門〉」を受賞しました。

■東京アートポイント計画とは

東京アートポイント計画は、地域・市民が参画するアートプロジェクトを通じて、東京の多様な魅力を創造・発信することを目指し、東京都とアーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)が展開している事業です。まちなかにある様々な地域資源を結ぶアートプロジェクトを、アーティストと市民が協働して実施・展開することで、継続的な活動を可能にするプラットフォームを形成し、地域社会の担い手となる NPO を育成します。http://www.artscouncil-tokyo.jp

■一般社団法人オノコロとは

文化及び芸術の振興を通じ、地域社会の発展に寄与することを目的として、2013年に設立。文化事業を通して、市民が「当事者意識」を持つことで主体的にまちに関わり、自らがネットワークやコミュニティを「自分ごと」としてつくり出すために、地域が活気にあふれ、市民が自発的な活動を継続的に行える仕組みづくりを行います。2013年9月より、としまアートステーション構想の運営に参加。

としまアートステーションYのつくりかた

発 行 日 2016 (平成28) 年6月30日

監 修 佐藤 慎也

編集・執筆 石幡愛、林曉甫、藤井さゆり、江口晋太朗、山本山田

写 真 としまアートステーション構想事務局、小林 麻衣子、山本山田

ゲーム制作協力 広瀬 眞之介

デ ザ イ ン 進士遙

発 行 としまアートステーション構想事務局

〒 I7I-0032 東京都豊島区雑司が谷 3-I-7 千登世橋教育文化センター BIF としまアートステーション Z



